



メリー・ローラン、
マネ、マラルメ
そのほかの人たち…

メリー・ローラン、
マネ、マラルメ
そのほかの人たち…

ナンシー市美術館
グラフィック・アート部門

2005年3月4日～5月9日

ナンシー

目 次

序文	
ナンシー市市長 アンドレ・ロシノ	5
メリー・ローランを讃えて	
ブランディエヌ・シャバンヌ	7
メリー・ローラン、世紀末の聖画像	
ジョイ・ニュートン	9
カタログ	33
メリー・ローランの友人たち	
ソフィー・アラン、ミシェール・レイネン	59
年表	74
書誌抜粋	76

ああ、遠くて、近い
そして色白の親しい人よ、
君は、なんて魅惑的なんだ、
メリー.....

ステファヌ・マラルメ



エドゥアール・マネ 《秋》

序文

3年前、ナンシー市美術館の創設百周年を祝ったとき、数々の名作がさまざまな地平から招来され、充実していったことを示すことで、提供者一人一人の寛大さをあらためて知らせることができた。

美術館の長い歴史を通じて、あらゆるコレクションの主要作品が、寄附、贈与、遺贈によって美術館の壁面を飾ることになったのである。それがこの美術館に他のどことも異なる独特の個性をあたえると同時に、何よりも大衆の一般的人気や好奇心を気にかけるような作者たちを讃えることには関心がないことをあらわしている。

メリー・ローランが象徴している生まれ故郷ナンシーとロレーヌ地方への愛、忠誠心、感謝の行為を理解するには、以上のように考えるのが妥当であろう。彼女は時代を共にした偉大な芸術家たちの女神で、彼らに靈感をあたえ、彼らのモデルとなり、助言者、そして女友だちでもあった。

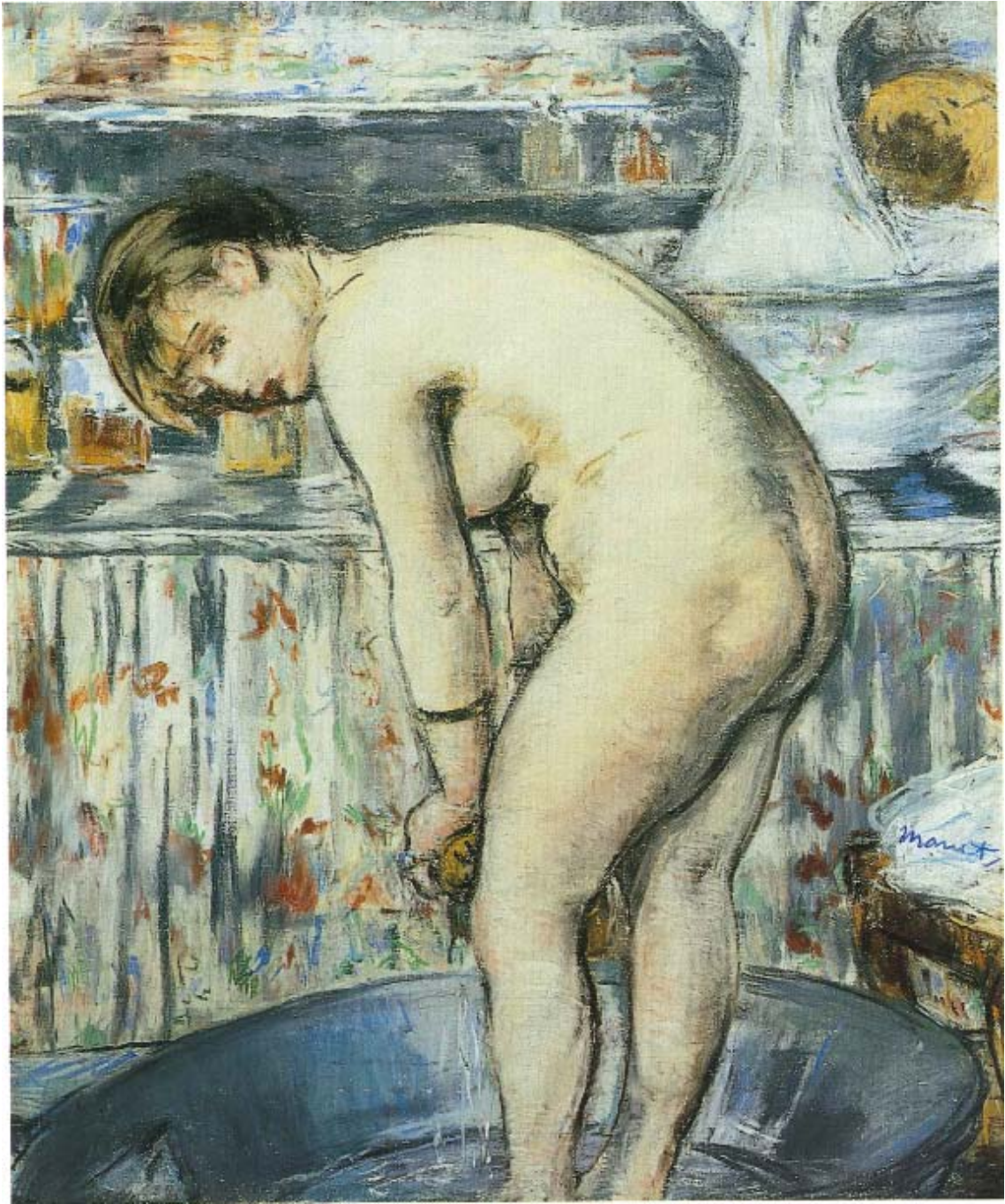
マネが描いた彼女の素晴らしい肖像画が市に寄贈された1905年以来、ナンシー市が巨匠の絵画を所蔵する最初の地方美術館となって一世紀になる、今回の展覧会はこの出来事を記念するものである。

のちにパリの人となり、皆から祝福され、賞賛された、すぐれた精神と心の持ち主である女性が親しんだ世界の想起させるこの展覧会は、ナンシー派を中心とした〈アール・ヌヴォー〉という、よく知られた芸術の潮流を生んだ19世紀の最後の10年を、彼女の強い個性を通して記録するものでもある。

アンドレ・ロシノ
ナンシー市市長
元大臣

水遣りをして朗らかに笑っている
そこには苦の種はなに一つない
豪華な庭の香しいバラ、
それがメリーだ

ステファヌ・マラルメ



エドゥアール・マネ 《盥のなかの女》

メリー・ローランを讃えて

1903年1月、ナンシーの市民は東部芸術協会報によって、マネの作品一点がまもなく美術館の展示用の刳型壁面に加わることを知らされた。実現には1905年を待たなければならなかったが、それは家族の懇請によって、メリー・ローランが作成した多くの遺言書とその修正文書を裁判所が審査して、《秋》¹の遺贈を正当と認めた結果であった。

この特筆すべき絵がナンシー美術館に到来してからちょうど100年になるのを記念して、寄贈者と作品のモデルを顕彰することにした。事実、19世紀後半の注目すべき人物の一人で、アンヌ＝ローズ・ルヴィエ（1849～1900）としてナンシーに生まれ、生まれ故郷に終生忠実だったメリー・ローランは、19世紀後半の重要な画家の一人エドゥアール・マネによって描かれた自身の肖像画で、彼女のコレクションのなかでももっとも重要な作品である《秋》（1882）を、公共のコレクションに寄贈することに決めたのである。この著作には、ジョイ・ニュートンによる彼女の豊かで興味伝記が収められている。

1882年、当時美術大臣だったアントナン・プルーストは、マネに四季をあらわす一連の寓話的な作品を注文した²。事実を描くために、マネは自分の周囲にいる人たちを選んで、四季を象徴させることにした。これには遊女の姿を装飾的な細やかさで描くことで、季節を連想させる日本の伝統、とくに歌麿の版画に触発されたことが大きかった。マネは生前、若い女優ジャンヌ・ドゥマルシ³の肖像である《春》と、メリー・ローランの肖像である《秋》を制作した。

《秋》はマネのアトリエで描かれ、1884年の画家の死後、ジャコブがメリー・ローランのために購入し（no.21、1550フランと評価された）、美術館に収蔵されるまでは個人が所有していた。

マネとメリー・ローランの出会いは、彼女がアルフォンス・イルシュに伴われて、1876年に画家のアトリエを訪ねたときに起った。このとき画家は自分のアトリエで、官展で落選した《洗濯》と《芸術家》を展示していた。そしてこの出会いから深い友情が生まれたのである。その後画家は、幾度もメリー・ローランをモデルにした。まちがいなく画家のもっとも美しいパステル画の一つである《盥のなかの女》⁴は、当時の画家、音楽家、さらには政治家たちを魅了したモデルの美しさを彷彿とさせてくれる。パステルによる多くの肖像画、たとえばディジョン美術館のものなどを調べてみても、《秋》が唯一油彩によるメリー・ローランの肖像画である。彼女の伝説となった優雅さが、この作品で頂点に達している。事実、メリー・ローランが選んだのは、デザイナーのウォルスの毛皮つきコートで、この服が赤味を帯びたブロンドの髪の色合いを際立たせ、絵の背景の日本の着物地もそれを強調している。この着物はマネがアントナン・プルーストから借りたものである。こうした細かな心遣いでもって、マネは注文主の厚意に応えたのである。フランソワ・カシャンはこの絵を評して、ルネサンスの影響、とくにピッサネッロの《エステ王女》⁵の影響を強調している。その作品では花柄の背景に女性の横顔が描かれている。こうしたさまざまな影響のうけ、さらに偉大な寓意画の伝統と結びついて、マネは一点の素晴らしい肖像画を生みだした。17世紀のオランダ絵画のように、マネはこの作品で暗色の毛皮つきコートに関してマティエールを巧みに用いることに成功している。

この展覧会ではメリー・ローランとマネが中心になっているが、同時に彼らが人生の一時期を共にした文学界の人たち（マラルメ、コペ、ユイスマンス、プルースト、ゾラ）、画家たち（ジェルヴェクス、ブランシュ、カリエール、ロダン、ナダール）、音楽家（アーン、シュネデル、オルメス）、それに友人たち（アントナン・プルースト、エヴァンス博士）が二人を取り囲む形になっている。これらの人たちはみな、この肖像画が生まれ出るのかかわったのである。

ブランディーヌ・シャヴァンヌ
主席資産管理官
ナンシー市美術館館長

-
1. 来歴、書誌、展覧会に関する情報は、作品の註、cat.14、45 頁に記されている。
 2. アントナン・プルーストはマネの次のような言葉を伝えている。「なんという姿だ、《春》の次には、メリー・ローランで《秋》を制作することにする。そのことを昨日彼女に話しに行った。彼女は自分でウォルスところで毛皮つきのマントをつくらせたのだ。ああ、なんというマントだろう、濃い鹿の子色の、くすんだ金色の裏地のマントだ、私は驚いてしまった。・・・私は別れ際に、彼女にこう言った。“この毛皮つきコートにあきたら、私のためにとっておいてほしい。”彼女は約束してくれた。これで私が思っている作品のざらっとした背景をつくることができるだろう。」
 3. 現在は個人所蔵。
 4. パリ、ルーヴル美術館、版画部門、目録 RF35739。
 5. パリ、ルーヴル美術館。

メリー・ローラン、世紀末の聖画像¹

芸術と文学の歴史に関する著作には、メリー・ローランの名前がよく出てくるが、大抵の場合、彼女が多くの詩人、作家、画家たちと親しかったことから、ジョージ・ムーアが、「豎琴そのもの」²と形容した、多分に風刺的表現をそのまま用いていることで満足している。だがわたしたちは、彼女が靈感をあたえた詩、小説、絵画のなかに、彼ら芸術家の眼を通した、あるいは彼らの夢であったメリー・ローランを見出すのだ。彼女は享乐的で、尻軽で、浅薄でもある若い娘だが、その一方、エドゥアール・マネの幾つかの作品では、エレガントで、よそよそしい女性である。アンリ・ジェルヴェクスの絵では、ヴィーナス、愛の女神であると共に単なる中年女である。ステファヌ・マラルメの詩にあっては、勇気づけてくれる女友だちであり、近づきたい至高の理想でもある。またマルセル・ブルーストにとっては、曖昧な過去をもつ女優だが、いまは上品で繊細なオデット・スワンである。メリー・ローランの手紙、とくにマラルメと交わした手紙と、これまで未発表の資料³によれば、彼女を描いた作品はどれ一つとしてメリーの本当に姿を伝えていないのだ。誰にあっててもそうだが、真実は複雑で、彼女は多くのイメージからなり、マネの絵やナダールの写真によって知られる謎めいた外見の裏に、本当の彼女がいるのだ。

彼女を讃美してやまない二人、アンリ・ド・レニエとジョージ・ムーアを信じるなら、メリー・ローランは「知的で繊細」であり、「大変機知に富んだ女性」⁴だった。彼女は芸術、とくに芝居と詩に強い興味があり、出版物の流行に関心を持ち、マラルメのような友だちの忠告に耳を傾けた。彼らは彼女の読書の道案内をしたのである⁵。アンリ・ペリュシヨによれば、「食欲な快楽の享受者である以上に、この肉体の花は、精神と才能を愛する人」⁶だというのである。この時期の写真の一枚は、彼女が貴重な絵のコレクション、とくにマネとジェルヴェクスの絵と、バリエとブルデルの彫刻を所持していたことを示している⁷。彼女は個人的に作品を注文し、そのサロンを知的出会いと思想の交換の場にすることで、友人たちの仕事を積極的に擁護した。サン・ラザール駅に近いアパートマンやランヌ通りの別邸はパリ最後のサロンの一つで、パリの社交界の女王といわれたグレフルエ男爵夫人のサロンと競い合う存在だった。ローラン夫人はそこに多くの作家たちを迎えた。アンリ・ベック、フェリシアン・シャンソール、フランソワ・コペ、オーギュスト・ドルシェン、エドゥアール・ジュダルジャン、ジョゼ・マリ・ド・エレディア、ジョリ＝カルル・ユイスマンス、マラルメ、ヴィクトルとポール・マルグリット（マラルメの従兄弟）、ギイ・ド・モーパッサン、ロベール・ド・モンテスキュー、ジョージ・ムーア、アンリ・ド・レニエ、マルセル・ブルースト、そしてヴィリエ・ド・リラダン。彼女にはその他にも多くの友人がいた。作曲家のオーギュスタ・オルメスとレイナルド・アーン、メゾ・ソプラノ歌手のオルタンス・シュネデル、テオドール・デュレとアントナン・ブルースト——彼は美術大臣だった——などの批評家やコレクター、ポールとエドモン・フルニエやアルベール・ロバンといった傑出した医師、ルイーズ・アベマ、ジョン・ルイス・ブラウン、アンリ・ジェルベックス、マネ、オディロン・ルドン、ジェイムズ・ホイスラーなどの画家たちである⁸。彼女の取り巻きの人たちに、多くの肖像画——絵や文章による——に直接靈感をあたえたメリー・ローランは、後世に引き継がれる遺産を残した⁹。わたしたちは、なにより彼らの芸術作品を通して彼女を知るのだが、ある程度は、彼女が彼らに宛てた手紙によっても、その人柄を理解するのである。多くの芸術作品に靈感をあたえ、これほどの崇拜の念をひき起こしたこの女性はそもそも何者なのか。わたしたちは本当に彼女のことを知っているのだろうか。

メリー・ローランの生まれと世間への第一歩は決して華々しいものではなく、よく比較されるゾラの「ナナ」を思わせるものは何もなかった¹⁰。彼女はアンヌ＝ローズ・シュザンヌ・ルヴィオとして、1849年5月にナンシーで生まれた。洗濯女でお針子でもあった母の娘で、父親は不明である。彼女はまもなく将軍であるカンロベール何某（1809～1895）の愛人になった。この将軍は戦争の英雄で、ナンシーの司令官であり、母親は彼のために働いていた。おそらくスキャンダルを避けるために、15歳の誕生日の2日後には、ジャン＝クロード・ローランという、27歳の食料品店を営む男といそいで結婚させられた。だが7カ月後には正式に離婚したのだった。彼女はその後ナンシーを去って首都に行き、舞台の仕事をはじめた¹¹。この時期に、仕事用にスタジオで撮影されたポートレートでは、スパンコールの付いた身体にぴったりした衣装を着た彼女や、こった化粧をした大柄で誘惑的な彼女、当時もてはやされた豊満な若い娘、その表情には気質がよく、楽しげな外観のときに気まぐれそうな若い娘が写っている¹²。彼女はゲーテ座、ヴァリエテ座、シャトレ劇場でさまざまな芝居に出たが——基本的には軽い音楽劇だった——、最初はほんの端役にすぎなかった。なぜなら彼女の名前は上演された芝居のプログラムや新聞や雑誌の記事には出てこないからである¹³。彼女が話題に上るようになったのは1872年の末のことで、『金の卵を抱く雌鶏』¹⁴へ出演したときのことについて、さまざまな逸話が挙げられている。1888年8月に、彼女がマラルメなど親しい友だちの助けを得て、最後に協力した『告白のアルバム』¹⁵では、自分が崇拝するものはヴィーナスだとしているが、これは興味深い指摘である。というのも多くの著者が、彼女が有名になったのは舞台上で愛の女神が誕生する伝説的なシーンを演じたからだとしているからである。「大がかりな芝居のクライマックスで、彼女が銀色の鍾乳石で飾られた巨大な貝殻から姿を現すのを目にした。・・・ある人は、“彼女は口よりもその胸でものを言う”と語っている」¹⁶。メリー・ローランは1874年頃には舞台を去ったが、それは彼女がアメリカ人の歯医者トーマス・エヴァンス¹⁷（1823～1897）の愛人になったときだった。エヴァンスはパリの中心部のローマ通り52番地——彼の診療所のすぐ近くだった——にあるアパルトマンと、ブローニューの森にあるタリュ荘を彼女にあたえた。この別荘には毎年4月から秋の終わりまで住むことになる。エヴァンス自身はボワ・ド・ブローニュー大通り43番地に住んでいた。第二帝政のもとで、彼は皇帝一家の正式の歯科医として働き、1870年〔パリ・コミューンのとき〕には、暴徒から逃れるユージェニー皇后を自らのアパルトマンにかくまった。そして忠実な友人として、彼女を安全な場所であるロンドンまで庇護しつつ連れていったのである。エヴァンス博士は大変な資産家（その多くはオスマン男爵のパリ大改造のときの不動産売買のおかげだった）、メリー・ローランにはきわめて寛大だった。彼女はウォース〔当時パリで名を馳せたイギリス人デザイナー〕などの有名な婦人服デザイナーの服を着て、素晴らしい宝石を所有し、自分の馬と馬車をもっていた¹⁸。エヴァンスは彼女が詩人や画家たちに魅かれても動じることはなかった。逆に彼女の愛人たちが彼の正妻に献身的であることを、表面的には問題なく受け入れたのである。

メリー・ローランは野心を秘めた、自立した精神の持ち主だった¹⁹。彼女は地方訛を矯正して、パリの舞台で成功するために発音のレッスンをうけた。さらに教養を積んで、自らを高めることを心がけた。エヴァンス博士もこうした知的向上心を励ましたのである。彼も大変教養のある人物で、ハインリッヒ・ハイネの『回想』の校訂版を出版し、「アメリカン・レジスター」誌²⁰を創刊した。芸術に情熱を注ぎ、フランス絵画と17、18世紀オランダ絵画を蒐集し、二人はコロ、ボダン、ヴォロン、ディアスなど19世紀フランスの画家にも関心を抱いた。27歳で、メリー・ローランはすでに個性的な趣味を身につけており、たしかかな判断力で前衛芸術を高く評価するようになった。1876年の春、彼女はサン・ペテルスブルグ通り²¹4番地のマネのアトリエを訪ねた。そこでは1875年の官展で、審査委員か

ら拒否された2点の作品、《洗濯物》と《芸術家》が展示されていた。彼女を同伴したマネの友人アルフォンス・イルシュに向かって、彼女が語ったコメントが、カーテンの陰で仕事をしていたマネの耳に届いたのである²²。彼はこの良い趣味の持ち主がどんな女性なのかを知るために、すぐに出て行った。彼女はまもなく画家の親しい友人、おそらくはその愛人となった。それというのも、マネが手紙でお前と呼ぶのは、妻のほかは彼女一人だからである。彼はメリーを知的な友人たちに紹介し、彼女が芸術への趣味を一層深める手助けをした。反対にメリー・ローランは彼女の自宅で、マネがエレガントなパリの女性たちに抱く関心を大いに刺激したのだった²³。画家のジャック＝エミール・ブランシュは、ローラン夫人はアトリエの住人のようになったと述べている²⁴。彼女の家はアトリエから5分と離れていないローマ通りにあった。彼女は画家にとって、その背丈、美しい肌色、赤みがかかった金髪によって大変刺激的だった。これらの色合いは、多くの同時代人に強い印象を残すことになる。アンリ・ド・レニエは、彼女の「輝くばかりの金髪の素晴らしい色」に興奮し、「彼女の真の美しさの本質は顔色と豊かな金髪にある」とつけ加えている。一方、ジョージ・ムーアは、彼女をローズ・ティーになぞらえている²⁵。彼女はマネの多くの作品に美しい姿をとどめているが、まずは1878年から描かれた一連のパステルによる裸体画をあげることができる。それらは《盥のなかの女》、《盥の女》、《化粧》、《ガーター・ベルトの女》などで、画家は慎重な配慮から、タイトルに彼女の名前を入れなかった。だがもう一人の賛美者のアンリ・ド・レニエは、「エドゥアール・マネ」と題した詩で、「かつてマネが描いた / 水浴する裸の女性」²⁶と書いている。この時代から、メリー・ローランはマネの好みのモデルとなり、マネの最後の5年ほどは、しばしばポーズをとった。パステル画の《肘をつくメリー・ローラン》(n.d.)では、有名な《フォリー・ベルジュールのバー》(1882)の画面左手に描かれている、白い女性と同じポーズをとらせている。多くのパステルでは、彼女が好んだ帽子をかぶっている(《ヴェールのメリー・ローラン》、《黒の帽子のメリー・ローラン》、《トック帽のメリー・ローラン》)。豊かな髪を見せている作品(《無帽のメリー・ローランの横顔》)、あるいは優雅なマントを着たもの(《毛の襟の短いコートを着たメリー・ローラン》)、その他、愛犬のプリンセスと一緒に彼女を描いたものなどがある(《子犬とメリー・ローラン》)²⁷。ただマネ晩年のもっとも美しい絵は、まちがいなく1882年の《秋》である。アントナン・プルーストは画家に四季を描く4点の作品を注文したのだが、マネはこのときすでに病気を患っており、2点しか完成できなかった(彼は翌年4月に亡くなった)。若い女優のジャンヌ・ドゥマルシが《春》を象徴し、このとき34歳だったメリー・ローランは、豊満な肉体と赤みがかかった髪とで《秋》を体現した。マネが当時の首都でもっともエレガントな女性の一人という評判だった対象を描くやり方は、彼女に対する彼の態度をよく示している。マネは、まず目につく彼女の魅力——数年前ならばパリ中の雑誌に取り上げられた胸や腰——を描くのではなく、豪華ではあるが暗色の毛皮つきコート²⁸を着せて、彼にとってはもっとも印象深いものを表現することに固執したのである。それは彼女の顔であり、精神であり、明るい青色の眼があらゆる知性であった。以前の作品では、滝のように肩に落ちかかっていた素晴らしい髪は、ここではしっかりと結ばれている。絵のエックス線写真から、顔のすぐそばに描かれていた花を消し、顔が一層浮き立つように、背景をトルコ・ブルーから日本風の壁紙に装飾的な菊を散らしたものに変更したことが分かる²⁹。

彼が数年の間にメリーに捧げた9点の油彩あるいは素描で、マネは彼女が芸術に対してもつ感受性がどれほどであったかを示している。さらにいくつかの肖像や花の習作に加えて、彼自身もっとも成功した作品の一つと考えていた《マクシミリアン皇帝の処刑》(1867)の小型版を彼女に残した³⁰。マネが彼女に宛てた手紙は——その幾葉かは美しい水彩画で彩られている——内容のない空疎な美辞麗句ではなく、画家の芸術的関心事や、二人の親密

な関係や、メリー・ローランが画家について持つ知識をよく伝えている³¹。彼女は生涯にわたり、画家の仕事を積極的に擁護し、幾つかの作品が売れるように手助けすることになる。彼の有名な作品の一つ《カフェにて》について、マネの友人で伝記を書いたアントナン・ブールストは、「この絵を私に買わせたのはメリー・ローランだった」³²と述べている。エヴァンス博士はおそらく愛人に勧められて（というのも彼自身は現代絵画の蒐集家ではなかったから）、マネの多くの作品を入手した。油彩では、《嵐のアルカション》、《引き潮の浜辺》、《ブリオッシュとクリスタルの花瓶のなかの花》³³などである。彼女は明らかにマネと仕事上の話をして、テーマの選択に影響をあたえた。ブールストははっきりと、「マネが花や果物についてアイディアを得たのは・・・メリー・ローラン夫人の自宅やタリュの別荘だった。そしてこれらの大部分を、アムステルダム通りのアトリエでパステル画に描きはじめたのである」³⁴と述べている。

画家が重い病に倒れると、メリー・ローランは彼を慰めるために花をもってよく訪れた。マネの最後の作品として知られるのは 1883 年に制作された素描で、死の数日前に描かれたものである。それはメリー・ローランのお手伝いであるエリザ・ソセを描いたもので、彼女は砂糖菓子がいっぱいの復活祭の卵をマネに贈ったのだ³⁵。マネの葬儀には、メリー・ローランは親しい友であるマラルメ、ゾラ、ベルト・モリゾ、モネ、テオドール・デュレたちと並んで出席した。彼女はジョージ・ムーアに、マネの命日には毎年リラの花を墓前に捧げると伝えている³⁶。1884 年にマネの作品の売り立が行われた際には、彼女は画家が描いた自分の肖像画を手に入れた。この肖像は、1900 年の彼女の早すぎた死のあとで、生まれ故郷であるナンシー市美術館に遺贈された。これは地方の公共施設に収蔵されたマネの最初の作品である。

ローラン夫人はアンリ・ジェルヴェクス（1852～1929）のためにもポーズをした。彼は 19 世紀のフランスの文学者たちによく知られ、ゾラが『制作』のファジュロールの人物像を造形するのに靈感をあたえた画家である³⁷。作中では、貪欲で、野心家で、躊躇することのない画家は、アレクサンドル・カバネルなどの画家から学んだ伝統的な技法を用いることで、新たなものに臆病な大衆の好みにも受け入れられ、それとともに印象派が直面する困難な局面をも上手く克服することになっている。これはある意味で正しいが、マネやルノアールの親しい友人で、彼をよく知る人たちによれば、カリスマ的人物であった人 [ジェルヴェクス] を、いささか単純化しているきらいがある³⁸。彼は長く輝かしい経歴をもち、公的、私的に多くの注文を受けたのである³⁹。

ファジュロール同様、ジェルヴェクスも 1893 年に結婚するまでは、その女性遍歴で名をはせていた⁴⁰。彼はまちがいなくメリー・ローランの親しい友で、彼女の家から数歩のローマ通り 62 番地に住んでいた。ドルナックがメリー・ローランの自宅で撮った写真は、マラルメのかたわらで、メリー・ローランの弾くピアノを彼が聴いているところを写したものである。壁には数多くの絵が飾られていて、そこには小型版の《マクシミリアン皇帝の処刑》も含まれている。そして鏡の上には、ジェルヴェクスの大きな《ヴィーナスの誕生》（1896 年頃、プティ・パレ所蔵、パリ）のために、油彩で描いた下絵の素描が掛っている。この作品は——波のなかから出現した赤毛の女神を描いている——明らかに劇場でヴィーナスに扮したというメリー・ローランの伝説を参考にしたものである。それだからこそ、彼女はこの油彩の素描を購入したのである。ジェルヴェクスはまた彼女の肖像画やエヴァンス博士の肖像画も描いていて、それらは 1892 年 5 月に開かれた「国民美術協会のサロン」に展示された⁴¹。この絵では肉づきのよい女性が、左の方を見ながら笑みを浮かべている姿が描かれている。彼女は高い襟のトルコ・ブルーのケープを着ていて、そのために明るい色の服とハート型のスカーフがのぞけている。これには水彩による絵もあって、同じようなポーズをとりながら、輝くばかりの微笑みを浮かべている。ただ彼女が羽織っ

ているのは赤いケープである。これら 3 点の肖像画はジャック・ドゥッセ文学文庫のコレクションの所蔵であり、同文庫は多数の書簡も所蔵している⁴²。これら手紙によれば、メリー・ローランはほかにも多くの芸術家と親しい関係にあったことが分かる。たとえば、彼女のために装飾的な扇を描いたジョン・ルイス・ブラウン（彼の作品もエヴァンス博士のコレクションにある）などである。マラルメは自らの著作集『漆の抽斗』（1888）の表紙用に、彼女がこの画家の前でポーズをとることを望んだのだった⁴³。

メリー・ローランの友だちのなかにはアメリカ人画家のジェイムズ・ホイスラーもおり、マラルメに連れられてボア・ド・ブローニュの彼女の家を訪ねてきた。彼はマラルメに覚書や著書の抜刷りと《画家の母親、灰色と黒の配色》の複製を送った。これはフランスでもっとも親しい友への感謝の印であった⁴⁴。メリー・ローランはエヴァンス博士のために、ホイスラーの『敵をつくる優雅な技術』一部と、版画数点を購入した⁴⁵。エヴァンス博士がホイスラーに石版画の写真版を見せてほしいと頼んだのは、まちがいで彼女の勧めによるものであった（彼はそのあと数点を購入することになる）。こうしてホイスラーの『優雅な技術・・・』は、雑誌「ザ・アメリカン・レジスター」に再掲されることになった⁴⁶。ホイスラーがマラルメに伴われてメリー・ローランのところへ食事に来たある夜、彼女はフランスでのアメリカ人画家の熱烈な賛美者の一人であるジョリ＝カルル・ユイスマンスも招待した⁴⁷。彼女はその後もホイスラーの仕事に興味をもって見守り、――庇護し――、彼の頼みで幾人かの著名な人物が彼をやり玉にあげた論争では、ホイスラーのために一役かうことになる。ホイスラーが、オスカー・ワイルドが〔マラルメの火曜会での談話を〕剽窃したと非難したとき、彼女は「最近のホイスラーの頭の皮を剥ぐような暴露話」を、エヴァンス博士の雑誌〔「ザ・アメリカン・レジスター」〕に掲載するように働きかけた⁴⁸。ホイスラーはメリー・ローランの肖像を描くことはなかった。しかし、ロンドンでは、彼が「大きな力をもつ魅力的な夫人」と呼ぶメリー・ローランのことを褒めちぎった。だからロベール・ド・モンテスキューの肖像画を描くために、一人でふたたびパリへやって来たとき、妻を安心させるために、マラルメとローラン夫人とは「浮かれて乱痴気騒ぎはしなかったよ、――ぼくは彼女に会わなかったから」⁴⁹と誓う必要があるとは感じていた。

メリー・ローランはかなりの数の肖像画の主題になったが（マネ一人で 13 点）、同時に彼女は数多くの作家にも靈感をあたえた。とくにマラルメがそうで、彼女に宛てた手紙の幾通かは絵で飾られている⁵⁰。ベルトラン・マルシャルが刊行したマラルメの〔メリー・ローランに宛てた〕全書簡集によって、これまでさんざん論じられてきた彼ら二人の関係が疑問の余地のないことが明らかになった。全体の調子と、そこにある暗示的な言葉は、彼らが愛人として親しい関係にあったこと、ローラン夫人がマラルメの人生で熱烈な愛の対象だったことを示している⁵¹。彼らがいつ最初に出会ったのか、その正確な日付は分からないが、最近見つけた資料で、二人がローマ通り 29 番地の同じ建物に住んだ 1873 年のある時期に、マラルメが彼女のことを知ったことが明らかとなった⁵²。1875 年に、彼はモスコー通り 87 番地に転居して、ふたたび彼女の隣人になった。そして、マラルメの詩集『半獣神の午後』にマネが挿画を描き、二人が並んで署名した 1876 年には、マラルメとメリー・ローランの仲は復活し⁵³、このときから二人は顔を合わせる機会に事欠かなかった。メリー・ローランは毎日のようにマネのアトリエを訪ねて来たとし、そこにはマラルメがいたからである。マラルメはヴェルレーヌに、「10 年の間、親しいマネに会っていた」⁵⁴と伝えているが、英語の教師だった近くのコンドルセ高等学校から帰宅する途中、画家のところへ寄る習慣だったのである。1876 年、彼はいつもより足繁くマネのところへ通ったが、それはマネが彼の肖像⁵⁵を描くためであった。同時にマラルメはマネを擁護する文章を書き、それはこの年に発表された。

マラルメと7歳年上の妻の関係は、この頃ではごく平凡でありきたりなものになっていた。彼らは1863年に結婚したが、1879年10月に、息子のアナトールが亡くなってからは——8歳だった——、マラルメ夫人は深い悲しみのなかに閉じこもってしまった。マラルメは娘とは理解しあっていたが、ときとして妻と娘から締めだされていると感じるようになった。彼はある日メリー・ローランにこう告白している。「ジュヌヴィエーヴと彼女の母親の旅行は大変順調にっています。多分よかれと思って私が同行するよりもよかったです。彼女たちはまるで『一つの帽子をかぶった二つの頭』のように打ち解けています」⁵⁶。詩人はメリー・ローランの許では、温かく思いやりのあるもてなしを受けて心が休まった。メリー・ローランはマネが認めているように、物事を楽天的に見て、耳を傾ける女性だった。『告白のアルバム』では、彼女はお気に入りの関心事として、「楽しみたいという気持」と述べている。ジョージ・ムーアは、彼女の「人生の歓びと……一瞬一瞬を楽しみたいという意識」について語っている。彼女の輝くような性格と、いつでも人を歓迎するその表情は、アンリ・ド・レニエにも強い印象をあたえた。彼女は「常に心がこもっていて、気どらず、陽気」⁵⁷に映った。マラルメは彼女について、「私はローラン夫人ほど、ごく細々したことにまで、生きる満足を覚える人を見たことがない」⁵⁸と語っている。彼女は他人にも積極的に助言した。そしてマラルメは彼女の判断を尊重した。取りかかっているテキストについて、彼女に次のように書いている。「きみが正しいよ、私は結末を削除した」⁵⁹。彼らの関係が、1883年のマネの死より前にはじまったと考える根拠はなにもない。だが画家はおそらく直感的に、絵画にたいする興味に後押しされた彼ら二人の親密ぶりを感じていたに相違ない。というのも、マネはメリー・ローランに、マラルメの飼っている猫のデッサンを贈っているからである⁶⁰。メリー・ローランは、1884年1月に国立美術学校で開催されたマネの回顧展をマラルメと同伴して訪れた。二人の親密さは——詩人の〔彼女に宛てた〕手紙がそれを証しているが——、この時期にまでさかのぼることができる。このころ彼は劇場や文学的な集まりに彼女を伴って行くようになった⁶¹。二人の関係は、メリー・ローランが彼に宛てた手紙から容易に推察できるはずなのだが、後世の研究者からは永遠に奪い去られてしまった。マラルメはそれらの手紙のほとんどを破り捨ててしまったからである。もし妻がそれらを読めば、大きな苦痛をあたえるのは間違いなく、それを避けようとしたのである。マラルメは〔メリー・ローランに〕こう書いている。「きみの手紙の破片を川に飛ばす前に、そこに愛しいくさぐさを見出すべく、橋の上で何度も読み返しました。そしてまるで若い恋人のように口にもって行って、口づけしました」⁶²。私たちに彼女の「声」を聞かせてくれるのはたまたま残された短い覚書や電報で、その多くはヴィリエ・ド・リラダンに関するものである。マラルメとメリー・ローランは、リラダンが晩年生活に困窮したとき、熱心に面倒をみたのだった⁶³。奇体なことに、マラルメが家を離れていたとき（多くはローラン夫人と一緒にだった）、妻に宛てた手紙では、メリー・ローランを喜ばしたことをほめかす言葉が書かれていて、これは妻を傷つけずにはおこななかったはずである。それはロワヤンのヴァカンス用別荘に滞在した折りの楽しさを得々と語ったものや、メリーがマラルメの夏の家があるヴァルヴァンを訪ねてきた3日間などだった⁶⁴。メリー・ローランは詩人の手紙を大切に保管していたが、それらは彼らの関係について多くを教えてくれる。ある時は、週に幾度も会ったこと、日曜日の様子、そして多くは夕食を共にした日のことなどである。彼の愛情がどれほど激しいものだったかは、たとえばヴァルヴァンの駅で会うことを決めていたのに、彼女が乗った急行が停車せずに通過してしまったことで味わった苦痛などによく表れている。彼は多くの詩篇や、四行詩、扇に書かれた詩句や手紙などで、彼女の注意をたえず惹こうと努めた⁶⁵。知的な繊細さの点で二人は似ており、それは彼が専念している芸術上の、あるいは知的問題を話題にするときによく現れている。ピングの店〔中国や日本のものを輸入販売していた〕に、日本の新しい浮世絵が届いたと

か、友人であるゾラのドレフュス事件に関する態度、ロダンの手で作られたバルザック像が、注文した文芸協会から拒否された際に、それを擁護したときなどである⁶⁶。1890年2月27日の夜、ヴィルジュスト通りのベルト・モリゾのアトリエで、マラルメがヴィリエ・ド・リラダンについてベルギーで行った講演が再演され、この会にはメリー・ローランとエヴァンス博士も招待された。招待客は、ドガ、ルノアール、モネ、ルドン、J-K. ユイスマンズ、アンリ・ド・レニエなどで、マラルメ夫人と娘の顔もあった⁶⁷。

実生活の面では、マラルメはいつもメリー・ローランの傍にいて、彼女がタリュ荘をすっかり改修したときには、部屋の模様替えを手伝った。それは彼女と多くの時間を過ごす好機であり、彼女にとっては彼の繊細な趣味を活用できる機会だった。彼女のローマ通りのアパートマンが、房飾りのビロードと毛皮のついた飾り布のドレープなど、19世紀末の過剰な装飾で彩られていたのに対して、別荘の方はずっとシンプルな装いだった。アンリ・ド・レニエはここをよく訪ねたが、リラや田他の花々が植わる小さな庭について述べたあとで、「天井の低い幾つかの小部屋には田舎風の心地よい家具が備わり、壁にはトルコ赤の布や小さな花柄のインド更紗が張られていた」と書いている⁶⁸。

マラルメは、彼女に宛てた面白い幾つかの四行詩で、この邸に触れている。

「パリの、メリー・
ローラン夫人、俗塵から離れた
「極上」のそのお屋敷は
ランヌ大通り9番地。」⁶⁹

すべてが彼の愛と崇拜の対象であった。メリー・ローランはまたマラルメにとって、豪華な世界に近づく途でもあった。それというのも、妻や娘に宛てた手紙でしばしば言及しているように、彼は経済的不安を抱えていたからである。マラルメは洗練された感覚の持ち主で、『最新流行』という表題の機関誌を主宰し⁷⁰、そこで女友だちとの会話や、優雅な生活や豪華な服装について書いている。同時に彼自身も生活していくなかで、極上のものを楽しむ度量とその方法を心得ていた。彼女はいつでも素晴らしい食事を用意してくれ、詩人にはお菓子の贈り物をし、彼の妻と娘には花束を送るなどや細やかな心遣いをみせた⁷¹。お返しに彼が贈ったのは、陶器製の猫といったありふれた品だった。この猫の置物は、ローラン夫人が、1897年にヴァルヴァンを訪れたときに見たマラルメの愛猫、「私の黒い娘」の子どもという冗談だった。

「リリットは貴女の世話で
部屋の片隅に座れるように
彼女が生んだ子猫をゆだねます
これで貴女はそのご主人にまた会えるというわけ。」⁷²

彼が理想化した人物の別の面を示しているのは、彼女のためにつくった、「ついに永遠が彼女を彼女自身に変えるとでもいうように」（「エドガー・ポーの墓」）などの詩篇である。

彼女の姿を描写した人びとには、メリー・ローランは、最初の舞台に登場したときにつくられた神話的イメージを、いつも備えている必要があった。ジェルヴェクスが1892年頃に描いた油彩や水彩による彼女の肖像は、成熟した肉づきのいい女性だったが、これらはオルセー美術館に所蔵されている（1863年の官展の成功のあと、皇帝に買い上げられる栄光に浴した作品として知られる）カバネルの《ヴィーナスの誕生》にも比すべき古典

的な裸体で、——水泡から姿をみせた赤毛のヴィーナスとして描かれているように、彼女は画家に靈感をあたえつづけたのである。それはゾラの心に火をつけた姿でもあって、——のちに述べるように——彼女の肉体的特徴と経歴が、「ナナ」の人物像を生み出すのに大いに役立ったのである⁷³。マネはメリー・ローランというテーマを、近代的様式、つまり自然主義的手法で再度解釈しなおした。1878年には、亜鉛の盥のなかの赤い髪を長くたらしした裸の彼女を描いている。これがパステル画の《盥の女》である。

マラルメとはといえば、そのイメージを詩句のなかで発展させた。彼の一通の手紙のなかで、波のなかから出てきた裸婦に言及し、それに続く四行詩では、古典的なヴィーナスのポーズをとるメリー・ローランそのものを詠っている。

「わがメリーは、似姿になるために、
永遠の沐浴場のなかの
白い反射に足をひたす、
でも若さの泉は彼女のうちある。」⁷⁴

詩篇「わが書物はパフォスの名の上に閉じられ」（1886）では、詩人はただ一人、炉床の火を掻き立て、理想の女性を夢みる⁷⁵。彼は窓から眺める雪のパリから遠く離れた、快適で官能的な熱暑のパフォスにいる自分を想像するのである。神話では、パフォスはヴィーナスが誕生した場所だが、詩にあってはその存在は朦朧としていて、決して直截的に示されるわけではない。マラルメの詩法の原則は、「ものを名指すことは、少しずつつくられる詩の楽しみの4分の3を失うことである。それを暗示することが夢なのだ」⁷⁶というものだった。

印象派の指標では、彼女を白い神殿（彼女が出てきた水泡、その肉体）と、香りのよい果物として描かれ、間接的に暗示される。勝ち誇る日々の「ヒヤシンス」は——それはボードレールの「旅への誘い」の「ヒヤシンスと黄金色」の空を思わせる——、女性の琥珀色の髪とその眼と、彼女を取り巻く海の青紫色を二重に喚起する。この作品では、メリー・ローランのイメージは、官能の喜びを呼び覚ます神秘的な枠組みとともに、詩人の心のうちの陳腐な書割と戸外の冬の景色とが、透かし模様になって作り出されているとも考えられる。マラルメはある日、彼女にこう言った。「最近、私の眼は、君よりも遠くの風景を見たことがない。なぜなら君はいつもその間に入って来るから」⁷⁷。その一方で、恋人と愛の女神を比べることが、女性への伝統的なご機嫌取りだとするなら、この喚起は——マラルメが詩人のなかで、もっとも暗示を得意としていたことを考えれば——パリの舞台にヴィーナスの役で登場したことで生まれたメリー・ローランの伝説を、ひそかに暗示してとも言えるだろう。他の詩篇では、彼女へのオマージュを別の形で捧げている。「炎の飛翔である髪」では、彼女は世紀末の抗しがたいほど魅力的な美女であり、その流れるような、耀くようなみごとな髪は、宝石を散りばめたようで、その眼はダイヤモンドのように輝いていた。「もしお前が望むなら、私たちは愛し合おう」というロンドでは、彼女の唇とその笑みの喜びに言及している。彼の手紙から、彼女のことを「孔雀 (paon)」あるいは「孔雀ちゃん (paonneau)」と——おそらくその華やかな化粧への少々いじわるな暗示から——呼んでいたことが分かるが、ときには「大きな子猫ちゃん」とか「メレンゲ菓子」とも呼んでいる⁷⁸。これらの詩篇は、彼女から得た詩的ヴィジョンのさまざまな断面を示している。彼女は、マラルメには常にそのように見えたのであり、ときには愛の女神であり、ときには神聖な思い人であった。1896年に、二人の恋人は〔写真家の〕ポール・ナダールによって写真に撮られたが⁷⁹、マラルメにとって彼女は、そこに写っている熟年を迎えた愛すべき女性ではなく、いつまでも理想の人だった。

メリー・ローランは、マラルメの死でひどく落ち込んだ。悲しみに健康を害したほどであった。彼女はエドゥアール・デュジャルダンに、「彼の死のあと、私の苦しみはやむことはありません」と語っている⁸⁰。マラルメの葬儀に出席する前に、マラルメの家族に手紙で援助を申し出ているのは、彼女の気立てのよい性格をよくあらわしている。「わたくしは貴女の方のために〈何でも〉いたします。何でも申しつけてください」、そして「わたしのものはすべて貴女の方のものです」ともつけ加えている⁸¹。これは事実で、彼女は遺書にジュヌヴィエーヴ〔マラルメの娘〕のための条項を書きこんでいた。所有するマネの作品すべてと若干のお金を、マラルメに遺贈することも考えていたのである。ジュヌヴィエーヴはその後もずっと、彼女とコンタクトを保つことになる。メリー・ローランは、マラルメが死の翌年、外科手術を受けた。エドゥアール・デュジャルダンに、「ヴェーヴ〔ジュヌヴィエーヴの愛称〕と彼女の母親は、わたしに本当によくしてくれています」と語っている⁸²。

メリー・ローランとマラルメの関係は資料によって詳細に裏づけられるが、逆に、フランソワ・コペ（1842～1908）との長きにわたる関係については、これまでのところほとんど言及されたことはなかった⁸³。フランソワ・コペはじつに多産な作家で、毎年のように、戯曲、詩集、さらには短編集を出した。ザネット役をサラ・ベルナルが演じた『行人』（1868）以降、彼は大きな成功を勝ちえた。終生独身だったコペは、ほぼ30年にわたってメリー・ローランに心からの愛情を注いだ。彼は480通におよぶ手紙や短信——これまで未刊行——や、多くの詩を送った。メリー・ローランの存在は、彼の詩のなかで色々な形で表現されている。彼女は何よりもまず近寄りたがたい神秘的なブロンドの女神として造形される。

「愛は失われたが、私はかつて靈感をあたえてくれた
後光に包まれた額にいまだ苦しめられている。
私を詩人にしてくれたのはそのブロンドの髪だ。」

彼女は手紙のなかに散りばめられた多くの短詩や、新年などに贈られた状況詩で賞賛をこめて描かれている。

「わたしの鳥さん、きみをマドリガルに詠いたい、
でもそれはきみにとってはどうでもいいこと
きみの身体、きみの髪、きみの肌は
百合を、黄金を、薔薇を思い出させる」（1887年12月30日）

さらに、彼女は何年にもわたって、この詩人にマラルメの「郵便つれずれ」を真似た愉快な短詩を真剣に書かせることになった。

「征服者の甘美な雰囲気を湛える夫人よ、
きみは、レンヌ大通り、9番地で、
ああ、わたしの手紙を、心のように
その半透明の爪で開いてほしい」
（1884年5月24日）

あるいは、

「卵みたいに禿げた郵便配達夫よ

この折った手紙をレンヌ大通り 9 番地の
ローラン夫人のもとへ運ぶことで
きみの広い心を見せてくれたまえ」

そして、

「沢山の宛名の中から、シテールの郵便配達よ
レンヌ大通り 9 番地、タリュ荘の
主、メリー・ローランと
間違えずに、読み取ってくれ！」
(ともに 1892 年 9 月 25 日の日付)

彼女が別宅の改装を行った際には、〔それに尽力した〕マラルメに遠慮することなく一篇の詩にしたためている。メリー・ローランは外交上の駆け引きよろしく、この詩を友人であり、恋のライヴァルであるマラルメの詩と並べて扉の上に掲げた。

「メリー、わたしは君の新たな住まいのために
わたしのやり方でセメントと
わたしの優しい心で
きみの家の石を一つ一つ積んだよ」⁸⁴

コペの手紙は装幀されて何冊にもなるが、年代順には分類されていず、手紙の多くは日付がない。それでもさまざまな出来事が手がかりをあたえてくれる。最初の手紙はコペが上院の図書室で働いていた時期（1869～1872）にさかのぼることができる。そして多くの手紙には「子猫」（これは彼が自分につけた渾名）、あるいは「大きな鳥」（彼女に愛情を籠めてつけた名前）の絵がつけられている。しばしば猫は、花を差し出しながら愛を懇願する姿に描かれている⁸⁵。これらの手紙はさまざまな感情を表現している。あるときは魂を奪われた初心な恋人の思いである。「私は自宅に帰ってきました。感動に酔い、きみに会え、君を抱きしめられて幸せでした。きみを私のもの、私一人のものにする以外のことは望みもせず、願いもしません」。あるいは、「私は 20 歳のように恋をしています」とも書いている。彼は彼女の肖像画にじっくりと見入る。（「私は肖像画を持っていることに満足しています。いつも眺めています。」）また、仲間の葬式からの帰りに、たまたま彼女を見かけて幸せだった。「大きい鳥さんが突然バルコニーに姿を見せました、日本の着物の部屋着を着て。」⁸⁶別のとき手紙は慎重さを示す。エヴァンスと彼女の仲を乱すことがないように注意を払っている。「籠に入った大きな鳥（比喩）」と呼んだり、彼女を鳥の形に描いて仄めかしている手紙は悲しげである。それでも彼は慎む術を心得てもいた。「貴女にはもっと用心してもらい必要がありますから、・・・オデオン座やフォワヨでは諦めることにしましょう。あそこで私たちは知られすぎていますから」⁸⁷。メリー・ローランも昔からの女友だちとして、彼の考えの反響装置〔シャンプル・デコ〕のように、彼の不安を払拭するような忠告をした。彼が自らの仕事に不安をもったときや、仕事が進んでいるのを彼女に伝えたい望んだときだった。「私は芝居の仕事に取りかかりました。きみが満足してくれるといいのですが」⁸⁸。さらに彼は彼女に短信を送り、学士院の会員に選ばれるために諸々のことを行ったこと、そして 1884 年 12 月 18 日、ついに選出されたと、勝ち誇った調子で伝えている。「私は 500 通以上の手紙やカードを受け取りました。きみを少々笑わせるために、モンテスキューのものを送ります」。彼のその後の手紙では、金の飾り紐で縁取りされた、学士院

会員の正式な服装を着た猫の愉快なデッサンが描かれている⁸⁹。メリー・ローランと交わしたコペの手紙は、彼が駆けあがろうとしていた文壇を、実際にどう考えていたか、その一面を示してくれる。「私は、服を着て、ヴィクトル・ユゴーの家へ夕食に行くために、たった今起きたところだ。ただただ鞭で打たれたくないという気持からだ」。あるいは「私たちはどこかで簡単な夕食を取りましょう、そして『居酒屋のお祭り』の奇行について君に話してあげるよ」。彼は手紙で文学上の好みも明らかにしている。彼ら二人は同じようにユイスマンスに熱中していた。「私はデ・ゼッサント〔「さかしま」の主人公〕に完全に魅了されました。なんとという本でしょう」⁹⁰。『貧しい人びと』の詩人は、上流社会の集まりに出席するときは、彼女を同伴することを望んだ。サン＝グラティアンにマチルド皇女を訪問したときの様子や、シャンティイにオマール公爵を訪問した折の様子を、長い外国旅行の場合と同じように忠実に記している⁹¹。メリー・ローランは、彼が重大な決断をするとき——たとえばラ・フレジエール＝アン＝マンデルに田舎の別荘を購入するときなど——それを真っ先に知らせる相手だった。同時に彼がよく罹った病気など、生活上の瑣事についても同様だった⁹²。彼は彼女の許に足しげく通ったが、手紙の多くはそうした訪問のことを事前に伝えるものだった。たとえば、「ネクタイをはずしてしまいたいと心から思います」、あるいは、「私が土曜日の5時にむさぼりたいのは、たった一つ大きな鳥さんです」といった調子である。彼が劇場やフォワヨ、あるいはシャンゼリゼ大通りの流行のレストランに彼女を連れ出さないときは、メリー・ローランが、マラルメ、リュイジ・グアルド、女性作曲家オーギュスタ・オルメス、女優のオルテンス・シュネデルといった友人とともに、彼を自宅の素晴らしい食事に招待した。そしてそのときは、舞台に立っていた頃を思い出させる歌で招待客を楽しませたのである⁹³。

メリー・ローランとコペの関係には紆余曲折があった。（「昔のように夕食に行きましょう。それはもうすっかり昔のことになってしまいました。」そして、「また馬鹿をはじめようというわけです！」）。彼らの関係は、恐らく流産といった事態を含めて、幾つもの危機を乗り越えてきたのである⁹⁴。二人が愛人関係でなくなったときでも、彼らはごく近い友人だった。「私の深い愛情をどうか疑わないでください」と彼は書いている。「彼女は変わってしまった……。でも私たちはずっと友人のままです、それはかつてないほどです」。コペは他の人たちと同じように、この女性を神格化していた。「きみは分かっているだろうが、私はきみを愛の神殿の特別の祭壇に祭って、その前では私の甘美な思い出の蠟燭がいつも炎をあげている」⁹⁵。

晩年、メリー・ローランはタリュ荘に、若い知的な人たちのグループを迎え入れた。そこにはポール・マルグリットや作曲家のレイナルド・アーンがいて、アーンはごく親しい存在となった。しかも1898年にマラルメが亡くなったあと、彼女は遺言書を書き変えて、アーンを遺言執行人とし、さらに主な遺産相続人にもした。マルセル・プルーストを彼女のところへ連れて行ったのもアーンで、これが凶らずも彼女の最後の「肖像」を生み出すきっかけをつくったのである。その肖像とは、作家のなかでももっとも絵画的な書き手によって描き出されたオデット・ド・クレシー〔『失われた時を求めて』の女主人公〕である。すべてのフィクションのように、それは単なる模写ではなく創造的な変容なのは明らかで、著者は主人公に、彼が身近で直接目にした特徴を付与した。それは気品ある服装であり、次第に太りはじめる体形であり、——ベル・エポックの流行であった中国趣味やジャポニスムに影響された——タリュ荘の家具調度、蘭と菊への偏愛、骨董趣味などだった⁹⁶。

マネが描いたメリー・ローランの肖像画は、『失われた時を求めて』のなかで、画家エルスティールによって描かれる絵に靈感を吹き込んでいるのは間違いない。プルーストはこの作品のなかで、とくにマネとホイスラーに言及している。そして彼は、スワンとオデット

との関係を理解するのに、それを「《春（プリマヴェーラ）》や・・・ボッティチェッリの《ヴィーナス》の魂にもっと入り込もうと努力して」⁹⁷研究を進める一人の美術専門家との関係と比較している。プルーストはローラン夫人の過去を参考にしたが、主人公のオデットも 1870 年代初頭にオペレッタに出演し、ヴァリエテ座のレヴュで、ミス・スクリパンの役で、はじめて役らしい役を演じたことになっている。この他、彼女の愛人のスワンは、エヴァンス博士と同じように貴族たちとつき合っている⁹⁸。最後に、プルーストは彼の女主人公に、メリー・ローランが知的な男たちが好きな点も加えている。ジョージ・ムーアは、「彼女は愛と本を書く人たちが・・・絵を描く人たちとの会話に没頭するのが常だった」⁹⁹と書いている。オデットもまた、「私は芸術家が大好きですわ・・・女性のことを理解するのはあの人たちだけですもの」¹⁰⁰とまで言う。

結論として、メリー・ローランがその官能的な強い存在感で、彼女の時代の偉大な作家や画家たち、とりわけマネ、ジュールヴェクス、ナダール、コペ、マラルメ、ジョージ・ムーア、プルースト、アンリ・ド・レニエ、エミール・ゾラなどの作品に命を吹き込んだのは明らかである。19 世紀末のパリの文学や芸術の世界に、これほどの影響をあたえた女性は他にいなかったと断言できる。彼女はじつに多くの芸術作品の対象となった。そしてそのサロンをさまざまな思想の交換の場とし、芸術家たちの作品に世間の関心を惹きつけることで、彼女を取り巻く人びとを積極的に擁護した。さらに幾つかの場合には、彼らの創作上の歩みを支援した。その見返りに、画家や作家たちはさまざまな形で、彼女に一種の永遠の貌をあたえたのである。

メリー・ローランは舞台では愛の化身を体現し、日常生活では神聖な愛の対象として、彼女を賛美する人びとの作品や手紙に靈感をもたらした。1896 年、マラルメ（彼の死の少し前である）と一緒にポール・ナダールが撮影した写真が示すように、晩年の彼女は盛りを過ぎた、いささか肉づきのよい、いつも優しい微笑を湛えた女性になっていた¹⁰¹。人生のこの段階で、彼女が熟慮の上で老いという当然の現実ではなく、自らの個性と、同時代の絵画や文学における聖画像だったことを示す、2 点の肖像を選んだことは驚くことではない。ローマ通りのサロンの鏡の上には、ジュールヴェクスが描いた華やかな裸のヴィーナスが、目につくように飾られているが、これは彼女がパリの社交界に知られるようになった、いささか苦い伝説を思い出させるものである。さらにタリュ荘の寝室の鏡の上方には、《秋》が——マネが彼女をモデルに描いた肖像画——飾られていて、この 2 点が、彼女の人間としての二つの特質を共によく表象していた。それは優雅な気品であり、いつも目覚めている好奇心旺盛な精神であった。

ジョイ・ニュートン博士
フランス語講師
グラスゴウ大学
フランス語、フランス文学部

1. このテキストは最初は英語で、「メリー・ローラン、世紀末の聖画像 (Méry Laurent, icon of the fin siècle)」のタイトルで、ウェスタン・オーストラリア大学の雑誌「フランス文学エッセイ (Essays in French Literature)」第 40 号、2003 年 11 月、141-179 頁に

- 掲載された。これをウェスタン・オーストラリア大学のアンドリュ・ハンウィック教授の好意ある許可を得て再録するものである。
2. ジョージ・ムーア『わが死せる生涯の回想』、ロンドン、ハイネマン書店、1928年、52頁。
 3. マラルメ『メリー・ローラン宛ての手紙』(以下『手紙』) ベルトラン・マルシャル編、ガリマール、1996年。ここに使用した他の資料は、パリのジャック・ドゥッセ文学文庫〔以下、BLJD〕、オルセー美術館、ナンシー市美術館、フランス国立図書館の原稿および版画部門に所蔵されているメリー・ローランに関する書類、さらにホイスラーについてはグラスゴー大学図書館〔以下、GUL〕の特別コレクションに保存されているものである。このテキストを作成する目的のために、関係資料を探すのを助け、引用を許可してくれたこれらの機関と関係者に感謝する。そして研究を経済的に支援してくれた英国アカデミーに深甚の感謝を表明する。
 4. アンリ・ド・レニエ『わが時代』、メルキュール・ド・フランス、1933年、75頁。ジョージ・ムーア『言明』、ロンドン、ハイネマン、1924年、267頁、および『わが死せる人生の回想』、52-56頁。
 5. 彼女はその詩のコレクションを完全なものにするために、たとえばヴェルレーヌの著作やボードレールのルドンが挿画を描いた版を購入している。(マラルメ『書簡集』第3巻、1889年12月20日付、375頁。第4巻、〔1890年〕2月3日、43頁、1890年5月3日、101頁を参照。) メリー・ローランとマラルメは本を貸し合っていた。ロティとペラダンについては、1895年10月末の日付がある詩人の手紙を参照のこと。199頁。彼はまた彼女にレミ・ド・グールモンとアルフレッド・ジャリの出していた雑誌「リマジエ」などを送っている。同書簡集、1894年10月23日付、180頁。フランソワ・コペはテオフィル・ゴティエの『モーパン嬢』をあたえ、バルザックを読むように勧めている。BLJD、MNR MS25/42 および 25/9。
 6. H. ペリュシヨ『マネの生涯』、アシェット、1959年、264頁。
 7. 写真は『アンリ・ジェルボックス、1852-1929 (カタログ)』、ジャン＝クリストフ・グールヴネック社、ボルドー、美術画廊、1992年、パリ、カルナヴァレ美術館、1993年。そしてニース、美術館、1993年、パリ＝美術館、1993年、52頁。アントワーヌ＝ルイ・バリ(1796-1875)による銅像のライオン像とアントワーヌ・ブールデル(1861-1929)の大理石の彫刻は、彼女の1896年1月6日の遺言書に記載されている。BLJD、MNR MS 1808。彼女は1884年2月2日、3日に行われたマネの作品の場合や、1891年2月23日に行われたゴーギャンの場合(マラルメと一緒に)のような、大規模な絵画作品の売り立によく顔を出した。(ジョン・リウワード『後期印象派。ヴァン・ゴークからゴーギャンまで』、ロンドン、シェッカー・アンド・ワーバーク、1978年、442頁、さらに『書簡集』第四巻、オクタヴ・ミルボー宛て〔1891年2月23日付け〕マラルメの手紙、201頁)。彼女はそこでマネの《秋》(1882年、油彩、ナンシー市美術館)とゴーギャンの《干し草のなか》(売り立カタログ、7番)を手に入れた。ゴーギャンについての詳細をあたえてくれたロナルド・ピックヴァンスに感謝する。
 8. 以下を参照のこと。アントナン・ブルースト「エドゥアール・マネ、回想」、白色評論、1897年2月-5月、テュソン、レコップ、1988年に再録、41頁。ロベール・ゴファン『生きているマラルメ』、ニゼ、1956年、152頁。アンリ・ド・レニエ『わが時』、72頁。マラルメは詩篇「紙を貼った横笛」のなかで、常連の招待客について言及している。アンリ・ベック(1860-1899)は、ポールとヴィクトール・マルグリット兄弟(1860-1918、および1866-1942)と同様に劇作家であった。ポールは夫婦間の問題を彼女に打ち明けている。BLJD、MNR MS 1635(n.d.)。小説家のシャンソル(1859-1934)は、彼がマラルメに献じたソネ集『始まりとその他の詩篇』(「エヴェヌマン」1887年4月7日刊)の一篇「黄金の

- 髪的美女」の名のもとに、メリー・ローランのことを描いている（『書簡集』第3巻、101頁）。オーギュスト・ドルシャン（1857-1930）は詩人で劇作家である。アントナン・プーレスト(1832-1905)は、マネとメリー・ローランの親しい友であった。彼女は彼に遺書とその修正文書(1896年1月9日付)のなかで、パステルの肖像画を贈与することになる。BLJD, MNR 1808。彼女はまたジュール・シャブランの著書をエドモン・フルニエ（1864-1926）に遺贈している。エドモンの父アルフレッド(1832-1914)は彼女の雇いつけの医者だった。アルベール・ロバン博士（1847-1928）のコレクションにはマネの彼女のパステルによる肖像画2点、《メリー・ローランの肖像》と《フォーリー＝ベルジュールのバーの娘の肖像》が含まれていた。これら二点はディジョン市美術館に寄贈された。
9. アンリ・ド・レニエは、『わが時』のエッセイのほかに、『わが出会い』（メルキュー・ド・フランス、1931年）と、「新文学」1932年7月23日号のなかでも、彼女についての記事を発表している。モンテスキューの彼女に関する自筆の覚書は、モンテスキュー・コレクション、国立図書館、n.a.f.15271, f0107s.に所蔵されている。彼は『消された足跡』、エミール・ポール・フレール、1923年、174-175頁と、『フランドルの二副対』、『フランスの三副対』、10/18叢書、UGE、1986年、242-246頁でも言及している。もう一人の賛美者で、『告白』や『回想』で彼女のことを多く取り上げたジョージ・ムーアは、『エブリ通りでの会話』（165頁）のなかでも触れている。マリー・ローランは、デュジャルダン（1861-1949）が、ムーアが、デュジャルダンが創刊した「独立評論」社から出版した『告白』を祝うためにエブリ通りで開いた夕食会に、ヴェルレーヌとともに出席した。彼女はマラルメを介して、『断ち切られた月桂樹』の著者〔デュジャルダン〕に出会ったのだが、デュジャルダンが雑誌「独立評論」に関して最初に催した昼食会に、マラルメは彼女を伴ったときである。彼女は彼とその妻で画家のジェルメーヌ・テセと友だちとなった。日付がある最初の手紙は、マラルメの1887年2月18日付け名刺である。彼はその上に、メリー・ローランの名前を書き加えて入る。BLJD, MNR MS 1615。他の手紙はメリー・ローランのデュジャルダン夫妻との友情と、彼らが互いに訪問しあい、贈り物を交換し、夕食を共にしたことを示している。彼女の最後の手紙は死のわずか1カ月前のものである。
 10. ジョイ・ニュートン「ゾラと星々の中の跳躍」、『物語における現実的なものの表象』、パリ、オセア、2002年、159-171頁を参照のこと。
 11. 1849年4月29日の出生証明書、結婚証明書(1864年5月2日)、そして離婚証明書(1864年12月5日)はBLJD, MNS MS 1804, 1805, 1806。彼女の夫ジャン＝クロード・ローランは1836年11月7日に生まれ、1891年8月18日にパリで没した。彼はリヴォリ通り142番地に住んで、ロブレ埋葬店に勤めていた。これは甥のエミール・ウィロームも同じで、メリー・ローランはこの甥とずっと連絡をとっていた。
 12. これらの写真はナダールの個人コレクションだが、現在はフランス国立図書館の版画部門に収蔵されている。最初の数葉の写真はモンマルトル大通り21番地のシャルル・ルートリンガー写真館によるもので、1872年にまでさかのぼる。メリー・ローランの胸より上の写真は、ビロードの服を着て、首と髪に真珠を巻いている。1874年4月の日付のある別の写真ではレースの服を着ている(Na 250+)。ロイトリンガーの写真は1875年のものだが、日付はなく、フォーブール・サン＝マルタンのマリネ工房制作の舞台用背景の前に立つ彼女は長靴にタイト姿である。これは雑誌「劇場ニュース」(Na 250)に掲載されたものである。これらの写真はいずれも彼女が豊かな髪をしていたことを示している。
 13. ジョゼット・ラウル＝デュヴァル（《メリー・ローラン》、雑誌「ルイユ」、七七号、1961年、33-38頁および80-82頁）によれば、彼女はヴィクトリアン・サルドウ作、J・オフフェンバック音楽の幻想的なミュージカル『にんじんの王様』に出た。この作品の初演は1872年1月15日である。次いでヴァリエテ座で1873年1月29日に幕をあげたオッ

フェンバックの喜歌劇『密猟者たち』に出演した。これらのプログラムはアルスナル図書館のコレクションに所蔵されている。

14. 新聞「ル・フィガロ」の1872年11月30日号によれば、メリー・ローランは『金の卵を生む雌鶏』でグロミネ（太った娘っ子）役を演じたはずであることを明かしている。ゲーテ座での初演は1872年12月28日であった。上演ポスターは次の年の6月1日まで張り出されていた。オーギュスト・ヴィテュは、「ローランは心ここにあらずといった様子だった」と軽蔑の調子で書いているが（同紙、1872年12月31日）、別の記事はさまざまな逸話や、他の新人たちの存在感を引き合いに出して、彼女のパフォーマンスの賞賛している。例えば「ル・フィガロ」紙の1872年12月31日、1873年1月9日、同年4月18日、5月3日、6月18日号。
15. 『告白のアルバム』は、マラルメにとって気に入りの名前はメリー・ローランであり、ローランが2番目にあげられていることを明かしている。BLJD、MNR MS 1249。
16. アルベール・フラマンは『マネの生涯』（プロン、1928年、326頁）で、彼女のこのような言葉で描写している。「人びとは一人の新鮮なアルザス女が、…シャトテ座のレヴュのフィナーレで、銀色の鍾乳石の装飾が施された貝から裸で飛び出すのを目にした」。A. タバランは『マネとその作品』（ガリマール、1947年、426頁）で、「彼女はヴァリエテ座の『麗わしのエレヌ』のなかで、ほとんど裸のヴィーナス役を演じていた」と述べている。またH・ペリュショ、263頁、J・ラウール＝デュヴァル、37頁。ピエール・デックス『画家エドゥアール・マネの生涯』、ファイヤール、1983年、290頁。およびソピー・モノレ『印象主義とその時代』、ドゥノエル、316頁を参照のこと。
17. エヴァンス博士の経歴と芸術作品のコレクションに関する詳細は、アンヌ・コファン・ハンソンの研究「二人のマネの物語」、「アメリカの芸術」誌、LXVII号、1979年[7月－12月]号58－68頁に多くを負っている。また、『エヴァンス博士の回想』、『第二帝政の追想』、エドワード・クライン出版、ロンドン、フィッシャー・アンウィン、2巻、1905年を参照のこと。メリー・ローランのことは、この著作では言及されていない。1898年1月8日の「ル・フィガロ」紙によると、彼〔エヴァンス博士〕は、2500万フランの資産を残したが、その大部分は彼の生まれ故郷フィラデルフィアの、エヴァンス歯科専門学校の設立に費やされた。彼のコレクションと資料もここに保存されている。
18. 彼女の遺書はサファイヤ、エメラルド、ルビー、真珠、ダイヤモンドの数々について記している（BLJD、MNR MS 1808、1891年10月14日の遺書、1896年1月9日付けの遺書への追加、そして1898年11月23日の遺書）。
19. 彼女が『告白のアルバム』で答えているように、自立心こそが彼女の性格の主要な特徴であり、彼女はいつも「人に好かれたい」と思っていた（BLJD、MNR MS 1249）。
20. 『マラルメ書簡集』第4巻、118頁脚注3を参照。「アメリカン・レジスター」はパリで刊行された最初のアメリカの雑誌であった。これは彼の友人のエドワード・クラインによって編纂されていた。
21. マネは1872年から1878年7月までの短い時期、近くのアムステル通り70番地にあるアトリエで仕事をした。1879年4月には同じ通りの77番地のアトリエに移り、そこには亡くなるまでいた。
22. アントナン・プルースト『エドゥアール・マネ、回想』、77頁。アンリ・モンドール『マラルメの生涯』、ガリマール、381頁。
23. H・モンドールは、彼女がマネをラ・ペ通りにあったウォルスの婦人服仕立てと帽子の店に連れて行ったと述べている（『マラルメの生涯』、ガリマール、441頁）。J・ラウール＝デュヴァル(38頁)は、詩人が当時流行だったカフェ＝レストラン、トルトーニへよく連れて行ったことをつけ加えている。
24. 「日頃の女性客」、J=E・ブランシュによる、「画家の語録、ダビッドからドガまで」、第一

- シリーズ、エミール＝ポール、1919年、145頁。
25. レニエは1888年に「独立評論」誌を祝福するための晩餐会に、マラルメと現れた彼女と初めて出会ったときのことを語っている。『わが時』、74頁、ジョージ・ムーア『言明』266頁を参照。
 26. これらの作品の主題がメリー・ローランであると同定することについては、ロナルド・ピックヴァンス『エドゥアール・マネ（カタログ）』、マルティニ、ピエール・ジアナダ財団、1996年、210頁を参照。「マネを知るある夫人に」という献辞のあるレニエの詩は、詩集『炎の残り』（メルキュール・ド・フランス、1921年）から引用した。詩人はこの詩集でマネによる彼女の別の肖像にも言及している。「もう一つの貴女は / トック帽を眉毛まで下げている」、233-234頁。彼が参照しているのは、水彩画の《盥のなかの女》と《トック帽のメリー・ローラン》である。これらはデニス・ラウルとダニエル・ウィルデンスティン編『マネのカタログ・レゾネ』、ローザンヌ、1975年、[以下、RWと表記]の24番と74番。
 27. マネの作品は——異なる表示のものを除くパステル作品——以下のコレクションのなかにある。《盥のなかの女》(RW23)、ルーヴル、版画部門。《化粧》(RW25)、チューリッヒ、E・G・ブルレ財団。《ガータの女》(RW22)、コペンハーゲン、オールドラップガード。《肘をつくメリー・ローラン》(RW51)(n.d.)、個人蔵。《フォーリー・ベルジェールのバー》(RW388)、1882年、油彩、コートールド研究所。《ヴェールのついた帽子のマリー・ローラン》(RW52)、1881年、ニューヨーク、個人蔵。《黒い帽子のメリー・ローラン》(RW73)、1882年、ディジョン、美術館。《トック帽のメリー・ローラン》(RW74)、1882年、ウィリアムタウン(マサチューセッツ)、スターリング・アンド・フランシス・クラーク芸術研究所。《横顔のメリー・ローラン、無帽》(RW53)、1881年、東京、ブリジストン美術館。《毛皮のついた短いマントを着たメリー・ローラン》(RW72)、1882年、ニューヨーク、個人蔵。《愛犬を連れたメリー・ローラン》(RW76)、1882年、ブダペスト、個人蔵。そしてマネ作とされる《灰色の羽のついた帽子の女》(RW85)、ボストン、個人蔵。以上はピックヴァンス、210頁による。これらのうちの幾点かは、もとは友人たちが所蔵していたものである。ジャック＝エミール・ブランシュは《トック帽のメリー・ローラン》を持っていたし、ロビン博士は《黒い帽子のメリー・ローラン》を所有していた。
 28. マネはアントナン・プルーストに、「彼女は自分でウォルスところで毛皮つきのマントをつくらせたのだ。ああ、なんというマントだろう、濃い鹿の子色の、くすんだ金色の裏地のマントだ、私は驚いてしまった」と言っている。
 29. 《秋》(RW393)、1882年の油彩のエックス線写真は、ナンシー市美術館のこの作品に関する文書のなかにある。同美術館が提供してくれた支援に対し深甚の感謝を表す。
 30. ローラン夫人のコレクションには以下のものがあつた。《マクシミリアン皇帝の処刑》の油彩による下絵(1867、コペンハーゲン、ニ・カールスバーグ・グリプトテック、RW125)。《3つの林檎》(「わが友メリー・ローランへ」という献辞がある)、1880年、ニューヨーク、D・S・ストラーレム・コレクション、RW359)。《野に置かれたコップのなかの薔薇》(1882年、グラスゴー、バレル・コレクション、RW419)。《メリー・ローランの横顔、無帽》(1881年、パステル、東京、ブリジストン美術館、RW53)。《若い娘の顔》(パステル、1881年、モントリオール、市美術館、RW61)。《マルグリット嬢》(黒鉛、1880年頃、RW417、アメリカ、個人蔵)。《闘牛士》(水彩および黒鉛、1862年頃、ウィルデシュティン、ニューヨーク、RW462)。《スペインのカップル》(黒鉛、1862年、個人蔵)。《長椅子の下の猫》(黒鉛、n.d. BLJD、inv.113)、《マラルメの猫》、ジョルジュ・ロダンバックによれば、RW626)。
 31. 例えば、マネは1880年9月28日付けの手紙(BLJD、inv.132)では、マルハアサガオの絵を描いている。彼は視力の問題などさまざまな悩みを打ち明けている。「視力は随分よく

- なりました。そのお陰で憂鬱に堪えています。」(n.d.)BLJD、MNR MS 1629。
32. A・プルースト、60頁。エティエンヌ・パロワール・ド・マルセイユは、1879年に、最初は《カフェ＝コンセルの片隅》(これは《ジョッキを運ぶ女給仕》のタイトルでも知られる、油彩、1878年－1880年、オルセー美術館、RW311)を選んだ。だが彼はその後、《カフェにて》(油彩、1878年、ウィンテルウール、O・ライハルト・コレクション、RW278)に変更した。マネは正式にメリー・ローランをこの売り立の代理人とした。「パロワールの件を長引かせないように。私にはお金が必要ですから。」(n.d.)[1880年6月]、BLJD、MNR MS 1630。フランソワ・コペは彼に、ウージェーヌ・ドゥラプランシュ(1836－1891)の未亡人を援助するために、知り合いの絵の目利きの仲間で、この画家の作品を買ってくれる者を見つけてくれるように頼んでいる。BLJD、MNR MS 23/16。
33. 《嵐のアルカション》(油彩、1871年、バーゼル、市美術館[寄託]、RW165)。《引き潮の浜辺》(油彩、1871年、ニューヨーク、個人蔵、RW169)。《ブリオッシュ》(油彩、1876年、フランス、RW251、個人蔵)。そして《クリスタルの花瓶のなかの花々》(油彩、1882年、個人蔵、RWには記載されていない)。エヴァンスが亡くなったとき、彼のコレクションにあった他のマネの作品の幾点かは散逸してしまった。
34. A・プルースト、44頁。
35. 《パステルの小さな肖像、エリザ〔メリー・ローランのお手伝い〕の素描》(RW89)、1883年。1883年4月30日の死の数日前に描かれたもので、マネ夫人によってエリザに贈られた。A・プルーストはエリザの訪問について言及している(72頁)。アルベール・フラメンによると、メリー・ローランはマネのアトリエを訪問する際に、よくリラや薔薇を持って行った。画家はこれを対象に花の絵を色々ところろみた。
36. ジョージ・ムーア『わが死せる回想』、52頁。
37. P・ブラディ『エミール・ゾラの作品』、ジュネーヴ、ドロツツ、1967年、161頁。さらにはR・J・ニエス『ゾラ、セザンヌ、マネ』、アン・アルポール、U・P(ミシシッピ大)、1968年、40頁を参照。
38. 「ジェルヴェクスは単に才能のある画家だけでなく魅力的だ」、A・ド・ベリナ『彼ら自身によるわが画家たち』、E・ベルナル、1883年、52頁。アンブローズ・ヴォラル、「彼は商売上手だったが実に気持のいい男で、それを見るためにまた来るように私を招いてくれたときは嬉しかった」、『ある画商の思い出』、アルバン・ミシェル、1937年、184頁を参照。彼はゾラやミルボーのような前衛的な批評家から称賛の記事を書かれて当然だった。ゾラは1880年の『官展』で、彼の経歴を述べたなかで、その「現代性という顕著な長所」と「真摯な態度、われわれの現代生活を愛している」点を称讃している。またオクタヴ・ミルボーは、「1882年の官展」で、彼の《ヴィレットの噴水》について、「これは素晴らしい、洒落ていて、優雅でさえある」と語っている。(ゾラ『官展』、F・W・J・ヘミングとR・J・ニエス、ジュネーヴ/パリ、ドロツツ/ミナール、1959年、248頁。ミルボー『初期の美術記事』、P・ミシェル、アンジェ、アンジェ大学出版、1996年、325頁)。
39. ジェルヴェクスは1881年に、パリ19区の区役所の結婚場の装飾の注文を受けた。彼はそこに《民法上の結婚》(一1881年、本来は油彩)を制作し、結婚式の招待客のなかに彼自身とともにマネとゾラを描き込んだ。絵は建物のなかで描かれた。1896年には、彼も参列したロシア皇帝ニコライ二世の戴冠式の巨大な絵を制作した(今日では失われてしまった)。絵は皇帝により買い上げられるはずだった。
40. 彼〔ジェルヴェクス〕は1893年にアンリエット・フォッシュと結婚した。そのとき彼は40歳だった。これ以前の多彩な女性関係については、ジャン＝クリストフ・グルヴェネック『アンリ・ジェルヴェクス』、54頁。さらに友人、ジョージ・ムーアの『わが死せる生涯』、19頁。

41. 官展のカタログ、452番、《M・L夫人の肖像》。450番、《エヴァンス氏の肖像》。マラルメは友人の小説家オクタヴ・ミルボーに、ホイスラーが称賛するこの肖像について好意的な批評を書いてくれるように説得しようとした。しかしこのときから画家のスタイルに失望していたミルボーは、彼にこう答えた。「私はジェルヴェクスが嫌いです。」(1892年4月5日、1892年4月25日、『書簡集』第5巻、485頁-456頁)
42. 《ロゼット(小さなバラ)》と題された水彩の素描(メリー・ローランの愛称の一つは「バラ」だった、BLJD, int. 91)。この書簡集には、ジョン・ルイス・ブラウン、フランソワ・コペ、オーギュスタ・オルメス、マラルメ、マネ宛の他に、彼自身のエドゥアール・デュジャルダン宛ての手紙も含まれている。
43. 彼の死に際して行われた財産調べによると、エヴァンスはブラウンの《泥のなかに突っ込んだ犬を載せた荷車》を所蔵していた(『書簡集』第2巻、303頁)。ブラウン(1818-1890)により、マラルメの本のために描かれた挿画は詩人の意にかなわなかった(現在所在不明)。彼の他に、ベルト・モリゾやモネに依頼されたものは届かなかった。それでマラルメは、ルノアールの裸婦像を口絵として載せることに決めたが、この女性はメリー・ローランのように、たくましい身体と豊かな髪をもっている。『ページ』(ブリュッセル、ドマン、1891年)の口絵を参照。さらに『書簡集』第4巻、530頁の脚注3、および第11巻、43頁。ただブラウンはこの本のために、幾つかの扇を描いている(1889年12月9日、BLJD, MNR MS 1784)。扇の一つには葉のついた小枝を描いた。そしてその上に、友人たちが書いたメッセージが印刷されていた。これはBLJDのコレクションにある。
44. 画家は彼女にデュレの『ホイスラー』を贈り、それに「わが麗しき友、メリー・ローランへ、1890年4月22日」という献辞を書いている。これはC・P・バルビエ編『マラルメ=ホイスラー書簡集』、ニゼ、1964年、に引用されている。この記事は最初、「美術雑誌」1881年、第23号、365頁-369頁に掲載され、次いで、『前衛評論』、シャルパンティエ、1885年、に再掲された。彼〔ホイスラー〕は同じく《灰色と黒の配置、芸術家の母の肖像》の複製も加えて、そこに「メリー・ローラン夫人へ、彼女の友ホイスラーの思い出に」という献辞を蝶のサインとともに書いている。この件の詳細については、1982年6月30日のオテル・ドゥルオのカタログ、1982年6月30日、第275号を参照。彼女はホイスラーの『10時(テン・オックロック)』のマラルメによる翻訳、ロンドン/パリ、独立評論社、1888年、を一冊所持していた。そこには「ごく親しいメリー・ローランへ、孔雀さんの客間の専属画家。ステファヌ・マラルメ」という献辞がある(オテル・ドゥルオのカタログ、1993年11月26日、ジャン・ロサード書房、100頁)。
45. マラルメからホイスラーへの手紙、1890年6月28日、C・P・バルビエの62頁に引用。『敵をつくる優美な方法』(ロンドン、ハイネマン、1890年)は、ホイスラーによる批評家たちとの論争の書である。メリー・ローランはエドゥアール・デュジャルダンに、雑誌「独立評論」が出版したホイスラーの4点のデッサンを送ってくれるように依頼した(MLからEDへ、1887年6月2日、BLJD, MNR MS 1730)。これらの版画には、ホイスラーの銅版画についてのフレデリック・ウェドモアーにあるデュレによる批評がついている。1887年2月、255頁-259頁。
46. エヴァンスはホイスラーの石版画2点を購入した。これについてはマラルメのホイスラー宛ての手紙、[1891年]2月14日、1891年4月5日、さらに1891年6月26日を参照。これらの手紙は、取り巻きたちが作品を購入するのに資するよう、彼女が作品の写真を見せていたことを示している。『書簡集』第4巻、196頁、218頁、256頁。彼女はエヴァンスに、彼の雑誌が画家について記事を書けるように勧めた。マラルメは彼女に、「私はわれらが友メリーの側近として気をつけていよう、そして掲載されたら、それを貴兄にお送りします」と書いている。[1889年5月]、同、第4号、118頁。雑誌「ザ・アメリカン・レジスター」は『敵をつくる優美な方法』については、1890年3月8日、4月19

- 日、4月26日、6月14日で言及している。そして1890年1月11日号では、ホイスラーがオスカー・ワイルドと行った最近の論争について報告している。
47. ホイスラーの妻トリクシー宛ての手紙、1891年10月28日-29日の手紙、GUL、W 594。ユイスマンスは、『現代芸術』(1883年)と『ある人びと』(1889年)で、ホイスラーの仕事を称讃している。そして彼に『さかしまに』に、「ジェイムズ・ホイスラー氏へ、[熱烈な信者である]J・=K・ユイスマンス」という献辞を添えて贈った(GUL)。著者〔ユイスマンス〕は、ホイスラーの作品を、「洗練されていて、個性的で、きわめて斬新だ」と見ていた。そして画家を「現実から超感覚的なものを引き出す優れた能力の芸術家」と形容している。『ある人びと』(出版連合、1975年、287頁、283頁)では、彼のホイスラーの経歴をたどりつつ、彼の《母親の肖像》を「その優雅さと深い共感の情に驚かされる観客の眼には、美しい人〔に見える〕」と考えていた。
48. 雑誌「真実」1890年1月2日号のオリジナルの記事は、「ザ・アメリカン・レジスター」の1890年1月25日号に再掲された。マラルメはホイスラーに、「私は昨日、友人のメリー・ローラン夫人に2枚の切り抜きを託したが、彼女はそれが次号に掲載されるだろうと知らせてくれた」と伝えている。[1890年1月]、GUL、M 128。
49. マラルメ宛て、1897年11月3日付けホイスラーの手紙、C・P・バルビエに引用、269頁。またホイスラーが妻に宛てた手紙、GUL W 598[1892年1月28日]。英文のテキストは、「私はマラルメやローラン夫人と“馬鹿騒ぎ”はしなかったよ—決して彼女とは会わなかった(I have not been “raking around” with Malarmé[sic] and Madame Laurent—Never seen her.)」と書き送っている。
50. 『メリー・ローラン宛ての手紙』、[1890年4月]、63頁を参照。この手紙には花を摘む女性と羽を広げた孔雀のデッサンがある。マラルメがメリー・ローランにつけた渾名は「孔雀」だった。彼は彼女についてパリ行の汽車に乗る孔雀というユーモラスなデッサンを描いている(n.d.) [1888年夏]、BLJD、MNR MS 1848/12。彼はまたマネによる《秋》の彼女を念頭においた四行詩で、「嘲笑を浮かべる色白の日本女性 / 私は起きるとすぐ着物として / トルコ青の布を身に着ける / その空のような青さは私を夢みさせる」、『状況詩』、「写真に」、『マラルメ著作全集』、B・マルシャル、プレイヤード叢書、第1巻、1998年、282頁。
51. マラルメは彼女に、「私は、大きな子どもさん、君が大好きだ。いろいろな流儀で。君は完璧な同志だから。和ませてくれ、陽気で、他にはない喜びを注いでくれる人だから」[1891年9月25日]と書き送っている。さらに、「パリ、君は見たかい、それは君だ・・・そして音楽だ」[1894年9月15日]。これらの手紙は、彼がどれほど彼女に会いたがっているかを示している。「今夜、私はどこかの通りの、ルイ十六世風で、バラ色の部屋にいないてはならないのだ」、1898年4月27日、『メリー・ローラン宛ての手紙』、81頁、175頁、241頁。
52. 『メリー・ローラン宛ての手紙』、17頁を参照。
53. ドゥセンヌ社、1876年。A・コファン・ハンソンの『マネの2点の物語』(60頁、脚注15)によれば、マラルメとメリー・ローランが親密な関係になったのはこのときからだった。
54. 『書簡集』第2巻、303頁。マラルメは1871年に、フォンターヌ高等中学校(後にコンドルセ高等中学校となる)の教師に任命された。そして彼は1875年3月10日に、ローマ通り87番地に転居した。
55. マネ《マラルメの肖像》(RW 249)、1876年、油彩、パリ、オルセー美術館。マラルメが書いた「印象派たちとエドゥアール・マネ(The Impressionists and Édouard Manet)」は、1876年9月の「月刊美術誌」に載った。
56. 『メリー・ローラン宛ての手紙』、[1896年11月9日]、208頁を参照。ジュヌヴィエーヴと母親は同じ寝室で寝ていた。ローラン夫人の訪問後、マラルメは彼女たちに、「それぞ

- れの部屋は、一つ一つ〔見せたが〕、とくに君たちの部屋は、お二人さん、本当に感嘆と驚きの的だった」と述べている。[1897年5月16日]、『書簡集』第9巻、177頁。
57. 『わが時』、174頁、179頁。ムーア『わが死せる思い出』、52頁。女嫌いのユイスマンスでさえ彼女の情熱と知性には感じ入っていた。『彼方』を読んだ後、1891年4月29日の夕食に彼を招待した際に、彼女は、「私が食事に招待したいとマラルメに頼む度に、彼は〈止めときなさい、彼はいま悪魔と会見中だ〉と言いましたが、いまではそれにも驚きません」(n.d.)[1891年4月]、と書いている。『さかしま』によってユイスマンスが異国の花に興味をもっていることを知ると、彼女は彼の許に蘭を持参した。そして彼がレジョン・ドヌール勲章を受章したときには、自宅の庭の花々を選びに来るように招いた。「あなたの友はタリユ勲章で貴方を飾れば最高に幸せです」(n.d.)[1891年9月5日]、BLJD、MNR MS 1626の1および4。彼は『覚書』のなかで、彼女について多くを語っている。「ル・フィガロ文芸」、1964年7月2日—8日号。
58. 妻と娘宛て (n.d.) [1897年5月16日]、『書簡集』第9巻、176頁。
59. 『メリー・ローラン宛ての手紙』、1897年4月22日、213頁。
60. 注30を参照。
61. 例えば、彼らの共通の友人であるエドゥアール・デュジャルダンによって催された晩餐会。これについては、H・モンドール『マラルメの生涯』、52頁および227頁。さらにH・ド・レニエ『わが時』、74頁で言及されている。
62. [1891年9月24日]、『メリー・ローラン宛ての手紙』、80頁。他の手紙は燃やされてしまった。同書、1889年9月30日付けの手紙、59頁を参照。
63. 彼はメリー・ローラン宅の夕食に、マラルメとともに招かれた。そして詩人は彼のために、「祖国」誌の劇評の仕事を得られるように努力した（マラルメからヴィリエ宛ての手紙、[1884年]7月9日付け、および[1884年]3月13日付け、『書簡集』第2巻、267頁、254頁）。ヴィリエもメリー・ローランから多くの刺激をうけ、自作の『残酷物語』（カルマン＝レヴィ、1883年）に、献辞を添えて贈っている。そこには、「メリー、貴女のアリエルの眼は / 空の上から少しは / この墓の色をした物語を楽しんでいる / そして貴女の夕べを楽しいものにするために / そこでは私の黒鳥の叫びも / 鳩の呼び声に変わります」と書かれている（1888年2月16日の日付のあるオリジナルの本は、BLJD、MNR 1321。これはA・レテとP・=G・カステックス編『著作全集』第2巻、ガリマール、1986年、860頁に再録されている）。彼のもう一つの著作、『異様な物語』には「貴女の熊より」という献辞が添えられている（M・ローランに関する文書、パリ、オルセー美術館、整理番号708）。マラルメはヴィリエが癌になったとき、いかにして彼を（後には残された彼の妻も）医学的にまた経済的に助けるかを友人たちに語っている。ローラン夫人はアルベール・ロバン博士とエドモン・フルニエ博士にヴィリエの治療を依頼し、彼女とマラルメは協力して、ヴィリエの息子を嫡子とするために、最後の瞬間に結婚式を挙げさせた（マラルメのベルト・モリゾ宛ての手紙、『書簡集』第3巻、1889年1月15日、283頁および293頁）。彼らは墓の建設費用も負担した（「ル・ジュルナル」紙、1895年1月30日）。ローラン夫人は〔ヴィリエの死後出版された戯曲〕『アクセル』が上演されたときはゲーテ座に出かけた（そこは20年前に出ていた場所だった）。この上演はヴィリエの未亡人とともに、マラルメ夫人メリーと娘のジュヌヴィエーヴのためのものだった。ジュヌヴィエーヴは父に宛てて、「美しい客席は美しいご夫人方で一杯でした。ローラン夫人は小間使いのエリザを従えて、左手の特別ボックス席に陣取っていました」（『書簡集』第6巻、1894年2月27日、233頁、脚注2）と書いて知らせている。
64. 彼女のヴァルヴァン訪問はメニューによって知られる。『メリー・ローラン宛ての手紙』、[1897年5月16日]、さらに1897年5月17日と18日については、『書簡集』第9巻、177頁、178頁、182頁。

65. 『メリー・ローラン宛ての手紙』、1893年8月、143頁-144頁、脚注3、および[1893年9月3日]を参照。「私は扉という扉を探しまわり、メリー・ローラン夫人と叫んだが無駄だった…私は夜通し起きていた…駅長も見つけようとしてくれた。いったい何があったのですか?」。彼らの共通の友人である、アンリ・ド・レニエによると、「ステファヌ・マラルメが美しい人を訪ねて来ない日はなかった」、72頁。
66. 『メリー・ローラン宛ての手紙』、[1898年春]と[1898年1月20日]、239頁、235頁。彼は、論議を呼んだロダン作のバルザック像について、「ロダンに対する文芸家たちの不法ぶりはこの上ない…ああ、大勢の大家たちが天才の証明の前に一列をつくっているが、彼らにはそれはまやかしかたでしかないのだ」(同、[1898年5月3日]、243頁)。
67. J・M・ネクトゥ『マラルメ、絵、音楽、詩。闇のなかの明るい眼差し』、アダム・ビロ新社、1998年、62頁、そして『書簡集』第5巻、317頁。
68. H・ド・レニエ、76頁。マラルメの慎ましい家計では、家を飾るのに自分の趣味を發揮することが許されなかったが、それでも彼のアパートマンには幾つか美しいものがあり、それらを詩のなかで詠っている——とくにザクセンの置時計、ヴェネチアの鏡、青と白の陶器のコレクションなど——、そしてマネ、ルノアール、ゴーギャン、ホイスラーによる彼自身の自画像、ロダン、マネ、モネ、ベルト・モリゾなどの作品である。J・M・ネクトゥ『画家たちの友』、「文学雑誌」第368号、1998年9月、43頁を参照。ローラン夫人宛ての多くの手紙には、彼が彼女のために骨董店で見つけた高価な品々についての詳細な記述が含まれている。例えば、『メリー・ローラン宛ての手紙』、1891年4月26日、10月31日、1892年4月4日、4月13日、6月20日、1893年3月25日を参照。
69. H・モンドール、G・ジャン＝オーブリ編『マラルメ著作全集』、プレイヤード叢書、1945年、98頁。家の扉の上に止められた四行詩、「笑い声を浴びて開いた扉 / そこには苦痛なものは何もなく / ただメリーの豪華な庭の / 薔薇の香りが匂いたつ」(同、145頁)。
70. 1874年9月から12月にかけて刊行された、この女性向け雑誌の記事の大部分はマラルメが書いたものである。
71. アンリ・ド・レニエは[メリー・ローラン宅の]食事と贈り物の素晴らしさについて、『わが時』のなかで詳言している、77頁、78頁。同様に、マラルメは手紙のなかで、「シクラメンの箱」や[1891年8月26日]、『メリー・ローラン宛ての手紙』、76頁、「ライン河沿いのタンの燻製」[1897年522日]、『書簡集』第9巻、194頁、「ローラン夫人のビスケット」[1896年11月8日]、C・P・バルビエ『ステファヌ・マラルメ資料』第2巻、ニゼ、1970年、129頁、を挙げている。彼女は劇場のボックス席を提供して、マラルメ夫人と娘を援助した(1897年4月28日)。またマラルメ夫人の歯の治療のお金を援助した。[1894年7月10日と1896年5月11日]、『メリー・ローラン宛ての手紙』、214頁、163頁、C・P・バルビエ『ステファヌ・マラルメ資料』第2巻、90頁。
72. 1894年4月1日付けの詩篇、『メリー・ローラン宛ての手紙』、151頁。マラルメ家には「ラ・ミーヌ」と呼ぶ子猫がいた(ジュヌヴィエーヴの父宛ての手紙、1897年11月2日、『書簡集』第9巻、306頁)。それでも詩人はリリットに愛着を抱いていた。
73. J・ニュートン『ゾラと星々のなかの跳躍』、第9章を参照。小説家は第1章で、舞台上《波から生まれるヴィーナス》の役を演じるナナについて語っている。
74. デッサン。マラルメはメリー・ローランに、「海のなかの、この小さな夫人は、きみに似ているよ」[1893年7月27日]と伝えている。四行詩は彼女のエヴィアンでの滞在についてのものである、1891年8月15日、『メリー・ローラン宛ての手紙』、134頁、75頁。多くの挿画は、A・ロドカナチ「マラルメとメリー・ローラン」、『愛書家紀要』、1979年、第4号、489頁-507頁。メリー・ローランは、例えば、「扇」、「夫人よ、余りに情熱を燃やさない…」、「おお、遠くのいと懐かしい」、「ロンドI、II」、「勝ち誇って逃れたあとは…」、「時の薫がたちこめた…」、「おまえの物語に入り込む…」など、このテーマとは関係

- のない他の多くの詩篇にも登場する。
75. C・チャドウィクは幾つかの詩篇を通して、マラルメとローラン夫人と関係を、官能的情熱から、それがもっとおさまった愛情の籠もった友情にいたるまでの時期を通して跡づけたが、この詩は詩人の愛が鎮まりつつあり（「わたしたちの愛は火をかきたて」）、その愛が抽象的な理想として新たな靈感の元となっているのを示すと考えている。「マラルメの詩のなかのメリー・ローラン」、「人文学雑誌」第106号、1962年4月—6月、256頁—261頁を参照。だが他方では、チャドウィクの解釈を受け入れたとしても、マラルメは自宅でいつものように暮しつつ、ヴィーナス / メリーを理想として夢見ている考えることもできるだろう。
 76. マラルメのジュール・ユレへの回答、「文学の進展についてのアンケートへの回答」、「エコー・ド・パリ」紙、1891年、『著作全集』（旧版）に収録、869頁。
 77. 『メリー・ローラン宛ての手紙』、[1891年9月25日]、81頁。
 78. 『メリー・ローラン宛ての手紙』、[1890年]、63頁、さらに1890年8月29日、67頁、1894年6月22日、8月30日、1897年5月18日、5月27日を参照。
 79. 1896年2月25日の日付の写真。
 80. MLからEDへ、1899年6月12日、BLJD、MNR MS 1770。
 81. MLからGMへ、1898年9月10日、『書簡集』第10巻、301頁。
 82. ローラン夫人は、マラルメの娘から彼の命日の挨拶状が送られてきたとき、心を打たれた。「私たちの亡き人を決して忘れることのない日です」。そして、ジュヌヴィエーヴが1901年に結婚することになるエドモン・ボニオに、「彼女は神聖な考えの持ち主で、この心はその思いで貫かれています」と書いている[1899年8月17日]、『書簡集』補巻、ロイド・ジェイムズ・オースチン、ニコラ・リュックヒュルスト、ヨーロッパ・リサーチ・センター、「フレンチ・スタディーズ 2」モノグラフィー・センター編、230頁。以前の遺書[1891年10月14日、1896年1月9日]の文言は、詩人に対する彼女の深い愛情を裏づけている。彼女は自分が所有するマネの絵のすべてと一万フランを遺贈するとしている。その一方でコペは、国立造幣局発行の銅メダルになった画家、ジュール・シャプラン（1839—1909）の作品1点しか受け取らなかった。マラルメの死の直後の1898年11月23日、彼女は遺書を変更して、マネの絵（《秋》を除き）をマラルメの従兄弟のヴィクトール・マルグリットに、シャプランの作品はエドモン・フルニエ博士に残された。彼女の金と資産の大部分は音楽家のレイナルド・アーン（1874—1947）に遺されたが、家族や彼女にずっと付き添ったエリザ・ソセなど親しい友のことも忘れなかった。彼女はジュヌヴィエーヴ・マラルメには、2万フランと銀製品のすべてを、「その父が〔彼女に〕示してくれた愛情の思い出に」に残した、BLJD、MNR MS 1808。
 83. 彼の父親と同じように、コペは1862年から戦争省で働き、1869年には上院の図書室に配属され、次いで1872年以降は、コメディイ・フランセーズの古文書保管員となった。彼の父は1869年に早逝したが、そのあとは母親や姉のアネットの面倒をみるなど家族の重荷を背負っていた。
 84. これらの詩篇は赤い革で装幀された5冊に収められていて、背表紙には猫の顔が刻印されている、BLJD、MNR MS 21-25。この〔コペとメリーの〕交際は、マラルメにとって問題ではなく、コペとはずっとよい関係にあった。コペは『19世紀フランス詩人選集』のなかのマラルメの詩に序文を書いた（『書簡集』第3巻、100頁、脚注3）。そしてマラルメはコペの誕生日にメリー・ローランのために詩をつくって贈った（H・モンドール『マラルメの生涯』、637頁）。最初に引用した詩篇は、M・ド・レキュール『フランソワ・コペ』、ルメール、1889年、454頁に掲載されている。他の詩篇は、BLJD、MNR MS、収蔵番号、24/17（1887年12月30日）、25/83（1884年5月24日）、25/74と25/75（ともに1892年9月25日）。新築祝いの詩篇は24/70で、幾つかの小さな異同のあるものが25/65に再録

- されており、「ポーにて、8月14日」と記されている。他の多くの手紙にも詩が含まれている。例えば、24/2、24/3、24/5、24/6、24/7、24/8、24/9、24/11、24/12、24/13、24/15、25/72、25/73。
85. 上院図書室勤務時代の手紙、21/17。猫と鳥のデッサンの例は、21/8。これらの二つのデッサンは彼の詩篇のなかに織り込まれている。「ヴェニスのあるライオンは / 君に描くのにぴったりだ / この怪物は鳥と猫をつなぎとめ / わたしたち二人の仲をとりもつ。」コペの数多い絵のなかには、ふざけて「E・マネ」とサインした汽車の絵もある。メリー・ローランが友だちの一人に自分が持っている絵を1点贈り物にしようとしたとき、彼は彼女に、「マネを送りたまえ、君は沢山持っているだろう！」といった (25/8)。
 86. 手紙、21/3、24/57、21/25、そして23/29を参照のこと。また「この愛の電報」を送った際には、彼が姉と夏休みをとっている間、毎日午後4時に彼のことを考えてほしいと頼んでいる。「そうすれば、君は同じ時間に私たち二人の心が同じ感情の中で一つに結ばれるのが分かるだろう」と書いている、21/39。
 87. 22/7 および 21/9。
 88. 彼が仕事に関して抱いていた不安については21/30を参照。戯曲の進展の報告は、24/61、23/55、23/64、23/86。小説『紫のアメデ』の進捗状況については22/22。
 89. 自分が選出されるための工作については、24/44、24/33、24/34、24/37、23/42。自分の選挙に関しては、24/36。学士院員会員の服を着た猫は、24/38、24/40、24/41。
 90. ユゴー、23/38、『居酒屋』、21/80。24/51を参照。彼はここでメリー・ローランに、「ロティをエリゼ〔大統領官邸〕に紹介するために」パリにいと述べている。さらに22/85では、木曜日のロダンバック邸での夕食会にはいかないだろう」と書いている。ユイスマンスへの賛辞については、24/39。彼がヴァカンスに持って行くように、彼女に推薦した本は、アナートル・フランスの『ジャン・セルヴァンの欲望』、ポール・アレーヌ『快適な太陽のもとで』、ダグラス・テロラ『カーテンの下』、そしてジュディット・ゴージェの『イゾリーヌ』である、22/73。
 91. サン＝グラティエンと皇女マチルドに関しては、22/65、22/73、25/104。ド・オマル公爵に関しては、22/87と24/31。北アフリカとスペインへの旅行、さらに改築についての詩はすべて1891年のもので、BLJD、MNR MS 21/47と24/77を参照。
 92. 田舎の家の購入に関しては、23/83。エドモン・ド・ゴンクールはこの家を訪れたことを、『日記』第四巻の、1892年8月7日の項で述べている。R・リカット編、ファスケル・エ・フラマリオン刊、1956年。度々の病気については、1/7、22/9、22/28、22/49、22/52、24/58、23/14、22/79。これらの手紙にはいずれも床に伏せる悲しげな猫のデッサンが含まれている。例えば、1/11、1/33。
 93. 会合については、21/59、22/8。オデオン座への初出演については、25/63。私的芸術サークルにおける『人と富』の上演については、22/86。フォワヨでの夕食会は、22/31、22/76、22/81、23/81 (1891年9月15日の日付け)、22/18、22/24。マラルメとの夕食は、22/23。グアルド、22/24。オルメス、22/24。シュネデーレ、22/44と22/46。
 94. 関係の変化については、25/64。「すべてはこれまでと同様だろう、《ほらまた馬鹿げたことが始まった!》ということになるよ」。おそらくは流産だった点については、23/25と23/24。「この厄介事を君にあたえたことに、私は自分に腹をたてている! 次はもっと慎重に、もっと上手くなるだろう」。さらに23/49を参照、「君が苦しんでいるときに、私のすべての愛は君とともにある」、そして、23/50では、「君が回復するためなら、多くの血を一ペイントだって提供するよ」と書いている。
 95. 23/100と22/15。メリー・ローランは、愛情の対象がマラルメに代わったあとも、長らくコペと会っていた。1893年5月3日付けの電報は、ウディノ通りの彼の自宅を訪問することに関するものである、25/85。

96. 『失われた時を求めて』、プレイアード叢書、1954年、第1巻で、プルーストはオデット/メリーに、豪華な衣装をあたえ（232頁、419頁、426頁、637頁）、腰回りが広がった服を着せている（617頁）。そして彼は彼女のアパートマンにオリエント風の室内装飾、家具、彼がメリー・ローランの家で目にした蘭や珍しい菊の鉢を配している（220頁-221頁）。マラルメによって助長されたメリー・ローランの骨董趣味は、オデットの特徴でもあり、その好みはルイ15世、16世風の家具とザクセンの陶器へと進んでいく（244頁、539頁、615頁-616頁）。
97. オデットをその肖像画と比較してみるという思いつきは（863頁）、おそらくはマネの肖像画と、プルーストがメリー・ローランの家で画家ホイスラーと出会ったことから生まれたものである。ホイスラーはプルーストがエルスチールを生み出す力となった。プルーストはオデットを、「マネ、ホイスラー、マラルメに靈感をあたえる女性だった」といつている、『草稿』II、『失われた時を求めて』第4巻、761頁。ポツツェリへの言及は『失われた時を求めて』第1巻、313頁。619頁では、スワンは《春》に触発された服をオデットに買う。
98. 『失われた時を求めて』第1巻、849頁。オデットの舞台は1872年10月に設定されている。ローラン夫人と同様に、彼女は招待客のためにピアノを弾く（『失われた時を求めて』第1巻、236頁と529頁。メリー・ローランの招待客は、とくにオッフエンバックとサルドゥの『麗しのエレヌ』のロール・タイトルで知られるオルタンス・シュネデール（1833-1920）とオーギュスタ・オルメス（1847-1903）をよく理解していた。オルメスはメリー・ローランが詩に曲をつけて彼女を賛美する人たちに送るのを助けた。オルメスの1893年7月24日付けの手紙については、BLJD、MNR MS 1714を参照。「これが貴女の詩です・・・“また彼女の接吻を得ようと考えなさい、/ 色白のヴィーナスの、永遠の薔薇の、/ それにはメリーを手に入れること!!”」。スワンの社交界とのつながりについては、『失われた時を求めて』第1巻、421頁を参照。
99. 『わが死せる人生の回想』、53頁。
100. オデットの画家についての解説については七九頁。スワンは芸術史家で、友人の一人に画家のエルスチールがいる。
101. マラルメは1884年に、彼女をフェリックス・ナダールに紹介した。ナダールは犬を抱き、毛皮を着た彼女を写真に撮った（写真はイヴ・ペイレ編のカタログ『マラルメ、1842-1898。エクリチュールの運命』、ガリマール/ 国立美術館連合、1998年、no.205に複製されている）。ナダールの息子のポールは、この優雅な大柄の女性がポーズしている——このとき40歳を超えていた——写真を撮った。《毛皮を着て立つメリー・ローラン》で、彼女は豪華な毛皮を着ている、同、no.204。版画にはマラルメが1896年1月1日の日付のある四行詩を書きこんでいる。その後マラルメと一緒に撮った写真では容色は少々衰えているが、この写真はJ・F・ボリ編『ナダール』、ハブシュミッド、1979年、460頁に複製されている。

カタログ

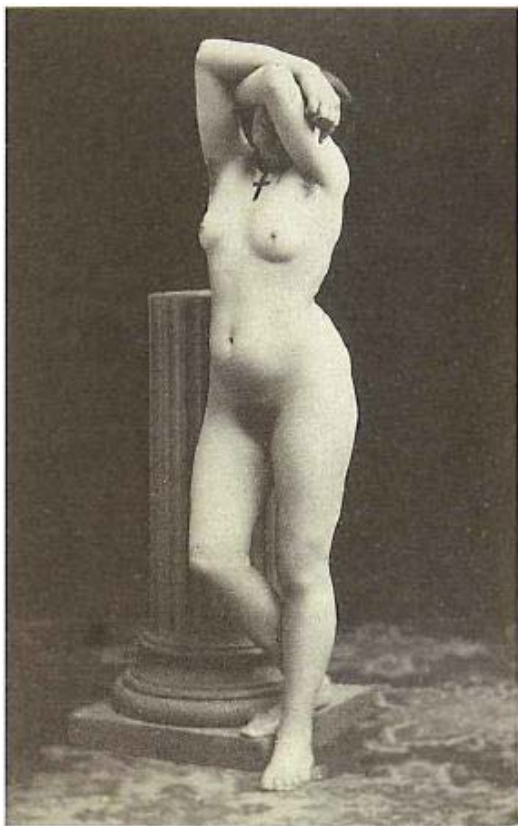
略語

BLJD ジャック・ドゥセ文学文庫

説明

Cat. 展示された作品、Fig. 参照する図

メリー・ローランと舞台



1

Cat. 1

作者不詳

「裸のメリー・ローラン、正面」

写真

来歴: アンリ・モンドール遺贈、1968

パリ、BLJD、目録 MNR MS 1831



2

Cat. 2

シャルル・ルートリッガー(1816-1881)

「椅子にまたがるメリー・ローラン」

写真

12×6.3 cm

パリ、フランス国立図書館、版画・写真部門、
整理番号 Na 250、箱番号 24

Cat. 3

ガストンとマチュ

「シャトレ座で役を演じるメリー・ローラン」

写真

10.5×6.3 cm

鉛筆書きの説明:「メリー・ローラン、小さな妖精」
パリ、フランス国立図書館、オペラ座美術・図書館、
整理番号 PF no.237



3



4

Cat. 4

レオポルド(クレルモン=フェラン)

「オベールの農婦姿のメリー・ローラン」

写真

1888年頃

16×8 cm

来歴:アンリ・モンドール遺贈、1968

パリ、BLJD、目録 MNR MS 1833



5



6

Cat. 5 および 6

アンドレ・アドルフ＝ウジェーヌ・ディストゥリ(1819-1889)

「メリー・ローランの肖像」

写真

来歴: アンリ・モンドール遺贈、1968

パリ、BLJD、目録 MNR MS 1828 および MNR MS 1829

舞台からサロンへ



7a

上記およびつづきのページ

Cat. 7a および b

シャルル・ルートリッガー(1816-1881)

「上半身像とさまざまなポーズをするメリー・ローラン」

写真9点

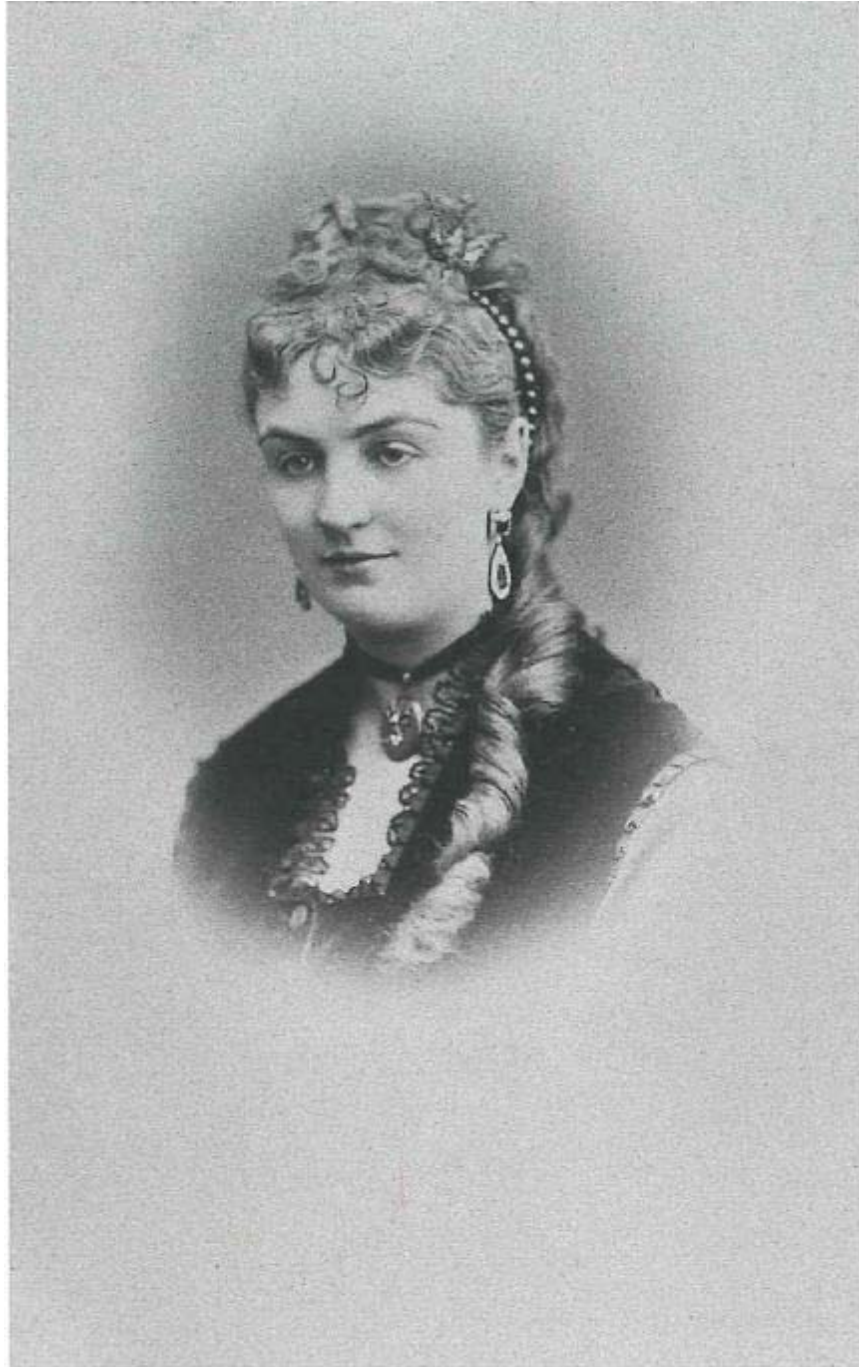
名刺版

来歴: アンリ・モンドール遺贈, 1968

パリ, BLJD, 目録 MNR MS 1817 から 1825



7b



8

Cat. 8

シャルル・ルートリッガー(1816-1881)

「メリー・ローラン」

写真

名刺版

来歴: アンリ・モンドール遺贈、1968

パリ、フランス国立図書館、版画・写真部門、整理番号 NA250 箱

Cat. 9

シャルル・ルートリッガー(1816-1881)

「メリー・ローラン」

写真

10.5×6.3 cm

裏に筆で、この写真を / 国境で見るように頼むこと / メリー・L

来歴:ギイ・フェラン遺贈

パリ、フランス国立図書館、オペラ座博物館・図書館、整理番号 PF no.231



9



10

Cat. 10

シャルル・ルートリッガー(1816-1881)

「メリー・ローランの全身立像」

写真

13.5×10 cm

来歴:アンリ・モンドール遺贈、1968

パリ、BLJD、目録 MNR MS 1815



11

Cat. 11

シャルル・ルートリッガー(1816-1881)
「メリー・ローランとエヴァンス博士」

写真

16.5×10.7 cm

来歴:ギイ・フェラン遺贈

パリ、フランス国立図書館、オペラ座博物館・図書館、整理
番号 MF no.1



12

Cat. 12

ジャコブ・ジグリスト=ヘルダー(ダヴォス / アンナ荘にて)
「犬とポーズをするエヴァンス博士」

写真

来歴:アンリ・モンドール遺贈、1968

パリ、BLJD、目録 MNR MS 1868

メリー・ローランとマネ

Belleme.
28 - 7
Je t'embrasse bien à travers
ta lettre. J'ai écrit M. et j'
mon séjour pratiqué en
Belleme. Tu n'as pas dit
que je ne partais pas. Mais
au contraire. Je vais te
venir en vacances - mais je
vais te le voir à Octobre
ou à la fin. et je t'embrasse encore
en grand air - hier
j'étais engagé à déjeuner
aux Montalais, avec la
bonne Valère - mais la

Cat. 13

エドゥアール・マネ(1832-1883)

《昼顔》

メリー・ローラン宛ての水彩画付き手

紙、ベルヴュ、1880年9月28日

19×12.2 cm

来歴:旧メリー・ローラン・コレクション、

アンリ・モンドール遺贈、1968

パリ、BLJD、目録 132

「僕には君の手紙では何一つ分からないよ、親愛なるメリー。ベルヴュの滞在が長引いているのは、私の具合が悪ということではない。逆に段々よくなっている。十月は天気がいまいだろうし、私はもう少し良い空気のもとにすることに。昨日はモンタレで、美しいヴァルテス[ド・ラ・ビニユ]と昼食をしたが、パーティは取りやめになってしまった。ヴィル・ダヴレーの城主夫人は誰か別の人と昼食をした。

友情をこめて。

E・マネ」



Fig. 1

Fig. 1

エドゥアール・マネ(1832-1883)

《黒い帽子のメリー・ローラン》

キャンヴァスにパステル

右下に日付とサイン:Manet 1882

56×47 cm

来歴:ロバン博士遺贈、1930

ディジョン、市美術館、目録 2958a

アルベール・ロバン博士(1847-1928)は著名な生物学者で、マネ、マラルメ、そしてメリー・ローランの友人だった。彼はサン・ペテルスブルグ通り4番地の、マネと同じ建物に住んでいた。近代画の見識ある蒐集家だった。彼はとくにマネの、《カフェ=音楽会の歌姫、ナナ》(キャンヴァスに油彩、1877、ハンブルク、美術館)、《ウィーン的女性》(イルマ・ブリュナーの肖像、紙に油彩、1882、ベルリン、ナショナルギャラリー)を所有していた。

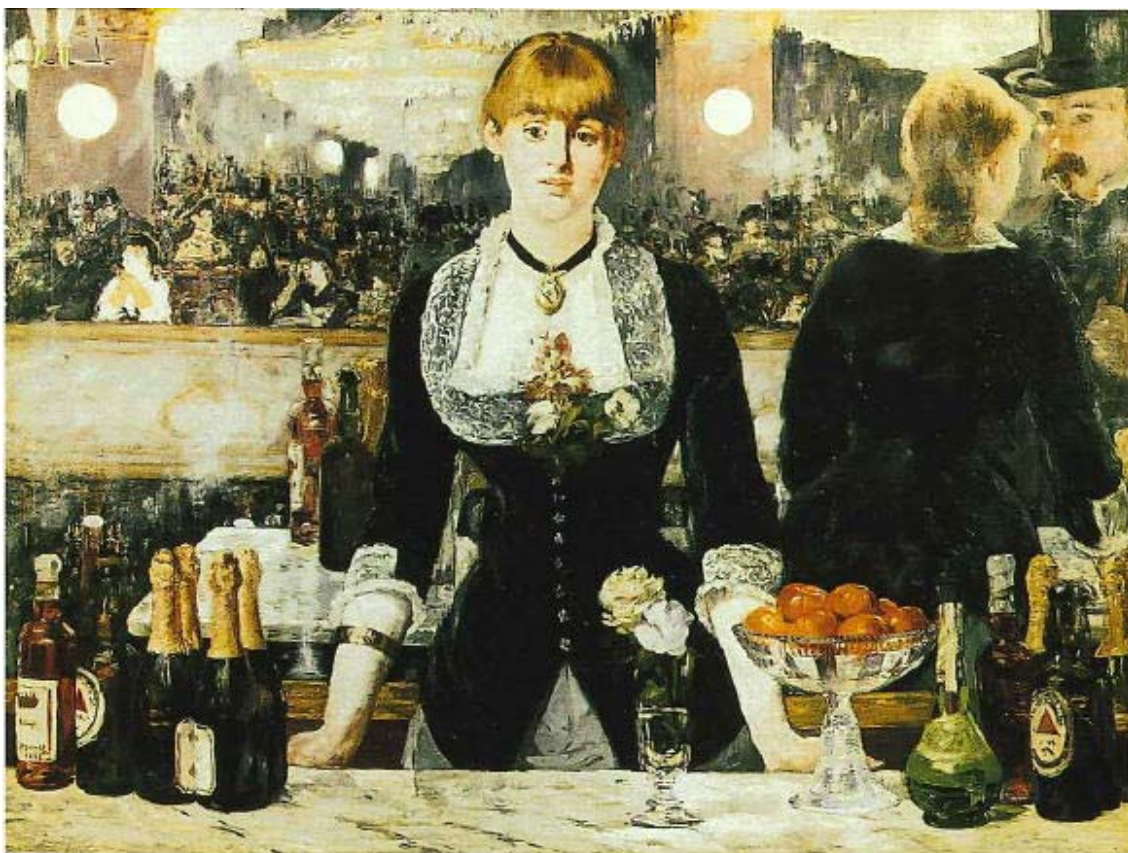


Fig. 2

Fig. 2
エドゥアール・マネ(1832-1883)
《フォリー・ベルジェールのバー》

カンヴァスに油彩、左下にサインと日付:マネ、1882
1882
96×130 cm
ロンドン、コートールド・インスティテュート・ギャラリー

メリー・ローランは白い服を着て、オレンジ色の手袋をはめ、黒い帽子を被っている。



Fig. 4

Fig. 3 (6ページを参照)
エドゥアール・マネ(1832-1883)
《盤のなかの女》

紙にパステル
右下にサイン:マネ
1878-1879
55×45 cm
パリ、ルーヴル美術館、目録RF35739

Fig. 4
エドゥアール・マネ(1832-1883)
《毛皮の女、メリー・ローランの肖像》

カンヴァスにパステル
1882
右下にサイン
54×34 cm
個人蔵

Cat. 14 (4ページを参照)

エドゥアール・マネ(1832-1883)

《秋》

カンヴァスに油彩

1882

73×51.5 cm

ナンシー、市美術館、目録 1071

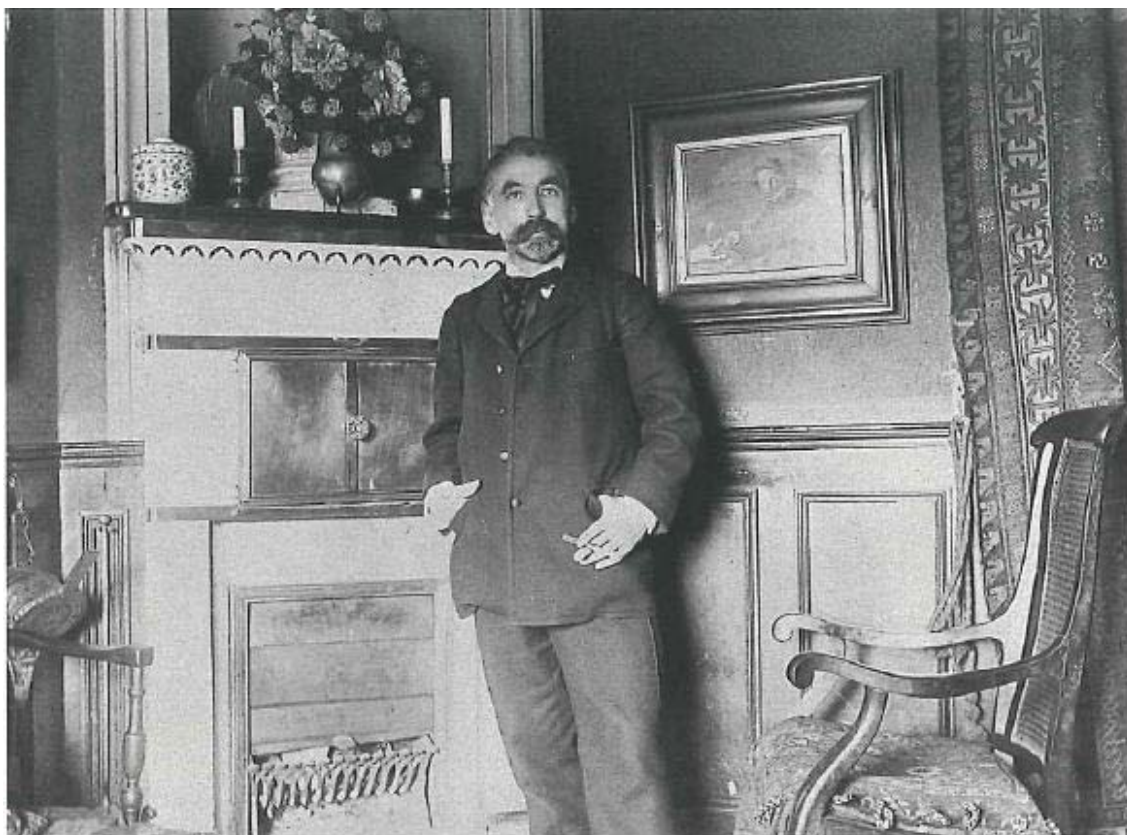
来歴:メリー・ローラン遺贈、1905



14

書誌:テオドール・デュレ『エドゥアール・マネとその作品』、パリ、1902(再版、1906、1919、補足付 1926)、no.295。É・モロー=ネイトン『彼自身が語るマネ』二巻、パリ、1926、第二巻、97-98頁、no.333。レキユエ『地方図書館瞥見、ナンシー』、『イラストレーション』誌、1930年6月28日、4556号、313-314頁、挿画、314頁、no.295。アドルフ・タバラン『カタログ史』、パリ、1931、no.372。ポール・ジャモ / ポール・ヴィルデンシュテイン『マネ』、パリ、1932、no.480。アドルフ・タバラン『マネとその作品』、パリ、1947、433頁、no.399。ジョン・リワード『エドゥアール・マネ、パステル』、オックスフォード、1947、50頁。ラウル・デュヴァル、1961、30-38頁、no.77、挿画、39頁。デニス・ルアール『エドゥアール・マネの全絵画作品』、パリ、1970、117頁、no.378、版LVII。サンドラ・ヴェンテューリ=オリエンティ、1972、no.372。ポール・ジャモ / ポール・ヴィルデンシュテイン『エドゥアール・マネ、カタログ・レゾネ』、ローザンヌとパリ、1975、第一巻、27頁、no.76。A・C・ハンソン『マネと近代の伝統』、ニューヘヴンとロンドン、1977、86頁、no.59。小倉 / 柏『印象派の画家たち3、マネ』、東京、1978、no.31。モズレ、1978、挿画、316頁。デュゾ『フランスの美術館の至宝』、ジュネーヴ、1979、181-183頁、no.47、挿画、189頁。クロード・レトリ『ナンシー美術館』、パリ、フランスの美術館および記念建造物協会、ナンシー市、アルバン・ミシュル、1989、挿画、78頁。ウオーノット『歴史のある絵たち』、1990、170-172頁。ジュリエット・ウイレルン=バロー編『彼自身によるマネ』、パリ、1991、293頁、no.230。『マネによるマネ』、東京、1993、412-413、no.660、挿画、413頁。『ヨーロッパの装飾芸術』、第三巻、1994、挿画、241頁。ベアトリス・サルモン『ナンシー美術館のコレクション、瞥見』、パリ、RMN、1999、184頁、挿画、185頁。展覧会:1884年1月6-28日、「マネ回顧展」、パリ、国立美術学校、no.113。1884年2月2-3日、「マネの売り立」、オテル・ドゥルオ、no.21。1910年、「ペルラン・コレクションのマネ」、ミュンヘン、近代ギャラリー、no.24。1932年、「フランス絵画展、1200-1900」、ロンドン、王立芸術アカデミー、no.478。1941年、「エドゥアール・マネ」、ニューヨーク、no.84。1941年、「エドゥアール・マネ」、シカゴ、no.99。1948年、「印象派展」、ヴェニス、第24回ビエンナーレ、no.33。1961年5月16日-7月31日、「マネ回顧展」、マルセイユ、カンティニ美術館、no.33。1979年-1980年、ロンドン、no.126。1983年、パリとニューヨーク、489頁-491頁、no.215、挿画、490頁。1989年、「街の印象派たち」、シャルロットテンランド、オールドプガール、no.48。1993年「エルスチールの像、プルーストと画家」、カーン、アベ=オ=ダーム、62頁-63頁。1994年6月25日-12月4日、石川県立美術館、福岡県立美術館、千葉そごう美術館、北海道帯広美術館、山形県立美術館「テントレットからマネへ、ナンシー市美術館の傑作」、212頁-213頁、no.81、挿画、213頁。1996年6月5日-11月11日、マルティニ、ピエール・ジアナダ財団、「マネ」、no.95。1997年3月14日-6月1日、パレルモ、パラッツォ・デューカーレ・ディ・コロルノ、「バロックからモジリアニ」、142頁。1998年-1999年、パリ。2001年8月-11月、府中美術館と奈良県立美術館、「エドゥアール・マネ」、no.12。2002年9月21日-2003年2月9日、「エドゥアール・マネと印象派の画家たち」、シュトゥットガルト、スターツ・ギャラリー、no.77。2003年10月6日-2004年1月11日、「プラド美術館のマネ」、マドリッド、プラド国立美術館、no.107。

メリー・ローランとステファヌ・マラルメ



15

Cat. 15

ドルナック

「マネによる肖像画の前に立つステファヌ・マラルメ」

写真

「自宅におけるわれらの同時代人」シリーズ

パリ、フランス国立図書館、版画・写真部門、整理番号 Eo 88b pt f0、t2

ドルナックは十九世紀から二十世紀の変わり目に、一括販売あるいは新聞雑誌に複製する目的で、専ら著名人の肖像写真を撮影した。「自宅におけるわれらの同時代人」シリーズの大半は、文学者、画家、科学者、演劇人たちをサロンや書斎、あるいは研究室で撮ったものである。



16

Cat. 16

アドゥアール・マネ(1832-1883)

《ステファヌ・マラルメの肖像》

カンヴァスに油彩

左下にサインと日付: マネ 76

1876

27.5×36 cm

来歴: マネからマラルメに寄贈され、ルーヴル美術館がルーヴルの友およびダヴィッド=ヴェイユ氏の援助を得て、マラルメの女婿エドモン・ボニオから1928年に購入

パリ、オルセー美術館、目録 RF 2661

肖像画は、サン・ペテルスブルグ通りの[マネのアトリエで]日本調の壁紙を前にした、手には葉巻をはさみ長椅子に寛いだ様子で座るマラルメを描いている。これは1873年以来の画家と詩人との間で結ばれた深い友情をよく表している。ヴェルレーヌは1886年に刊行した『呪われた詩人たち』のマラルメを扱った部分の口絵にこの絵を写真複製させた。



17

Cat. 17

ステファヌ・マラルメ(1842-1898)

12日の一日

自筆の手紙とデッサン(羽ペンと黒インク)、ベージュ色のプリストル紙

1888年夏

9.1×11.3 cm

来歴: アンリ・モンドール遺贈, 1968

パリ, BLJD, 目録 MNR MS 1248 12

ユーモアをこめて12日に描かれたこの自筆原稿は、おそらく1888年夏のもので、デッサンは孔雀の形をしたメリー・ローランの汽車旅行に関するものである。



19

つぎのページ

Cat. 18

ステファヌ・マラルメ(1842-1898)

「告白」、1888年8月15日

出版人の手になる箱に折りたたんで入れられたアルバム

27×20.5 cm

来歴: アンリ・モンドール遺贈, 1968

パリ, BLJD, 目録 MNR MS 1249

Cat. 19

ステファヌ・マラルメ(1842-1898)

「メリー・ローラン宛ての手紙、1892年7月26日付け」

絵が描かれた和紙に自筆

31.5×22.5 cm

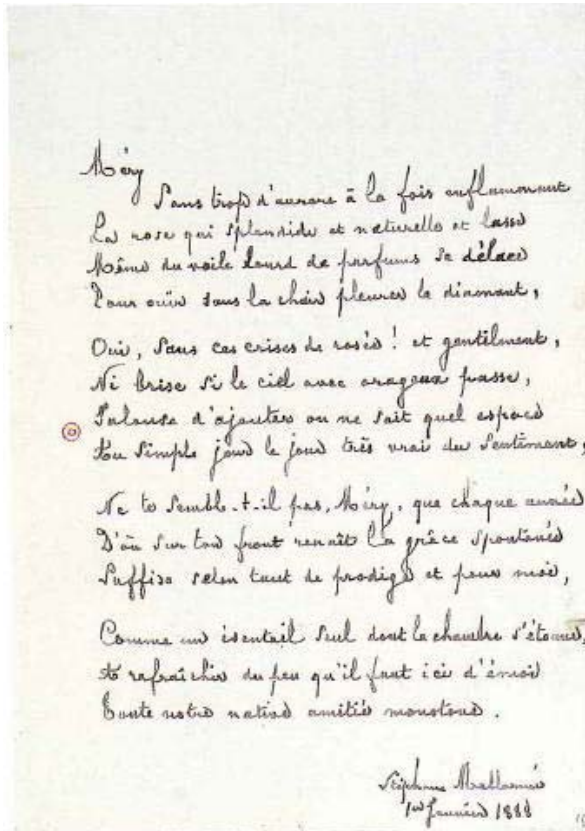
来歴: アンリ・モンドール遺贈, 1968

パリ, BLJD, 目録 MNR MS 136/1

Quelle est votre vertu favorite?	{ l'enfance
Vos qualités favorites chez l'homme	{ l'exactitude dans les paiements à me faire
Vos qualités favorites chez la femme	{ toutes
Votre occupation favorite	{ (ceci est indiscret)
Le trait principal de votre caractère	{ à en manquer
Votre idée du bonheur	{ rêver
Votre idée du malheur	{ ne pas allumer de cigare
Votre couleur et votre fleur favorites?	{ la blancheur des fraises, la bouche
Si vous n'étiez pas vous, qui voudriez vous être?	{ tout le monde
Où préféreriez-vous vivre?	{ je ne le dis pas, pour y aller seul
Vos auteurs favoris en prose	{ ceux qui font des vers
Vos poètes favoris	{ quelques uns, dont j'en suis
Vos peintres et compositeurs favoris	{ le coucher du soleil et le vent
Vos héros favoris dans la vie réelle (l'Histoire)	{ des inconnus
Vos héroïnes favorites dans la vie réelle	
Vos héros favoris dans les romans ou la fable	{ Hamlet
Vos héroïnes favorites dans les romans ou la fable	{ Méduse
Votre nourriture et votre boisson favorites?	{ ce que découpe et me verse ma voisine
Vos noms favoris	{ d'abord Méry, ensuite Laurent
L'objet de votre plus grande aversion	{ un autre
Quels caractères détestez-vous le plus dans l'histoire	{ les principaux
Quelle est votre situation d'esprit actuelle	{ une facilité à l'illusion
Pour quelle faute avez-vous le plus d'indulgence	{ celle qu'on réussit à me cacher
Quelle est votre devise favorite	{ "haut droit!"

Stéphane Mallarmé

Papeterie: E. M. VIK, 18, rue de la Paix, à Paris.



20

Cat. 21

名刺に書かれたメリー・ローラン宛ての四行詩の手紙
(フランソワ・コペがマラルメの四行詩の郵便を真似たもの。「暖かい、
インバネスに包まれた / 彷徨える郵便配達夫よ これを / メリー・ローランの許へ運んで行け / ラヌヌ大通り9番地のタリュエ荘の。」
1892年9月22日の日付のスタンプが描かれている。)

装幀された5冊のノートにあるデッサン付の自筆
19×13.5 cm
来歴: アンリ・モンドール遺贈、1968
パリ、BLJD、目録 MNR MS 21 82

フランソワ・コペのこの四行詩の郵便は、マラルメが1892年9月26日にヴァルヴァンから出したメリー・ローラン宛ての手紙で触れられているものに間違いがない。「コペをからからたために、この時期の郵便配達夫はインバネスではなく作業ズボンをはいていると言ってやってください、それに私なら、音韻を正確に同調するために、ヴェルレーヌという言葉と韻を踏むとも。」

Cat. 20

ステファヌ・マラルメ(1842-1898)
《メリー / あまりに暁を・・・》

自筆原稿
1888年1月1日(裏面には、1887年12月31日)
27.8×19.5 cm
来歴: アンリ・モンドール遺贈、1968
パリ、BLJD、目録 MNR MS 1192

このソネの裏には、マラルメの手で、「土曜日朝、1887年12月31日 / 出発に際してこれらの詩句を君に残していく。明日私がまだパリにいたとしたら、君を腕に抱いているはずの時間に、本当ならこれらの詩句が君の手に入れたいと思う。少しでも君の側にいられることになるからだ」と書かれている。この詩はベルトラン・マルシャルが明らかにしているように、1896年2月10日の「ル・フィガロ」紙に発表された「夫人よ、あまりに情熱を・・・」の元のヴァージョンである。



21



22

Cat. 22

フェリックス・トゥルナション、通称ナダール(1820-1910)
「子犬を抱く毛皮を着たメリー・ローラン」

写真

来歴: アンリ・モンドール遺贈、1968
パリ、BLJD、目録 MNR MS 1813

ナダールの写真については、マラルメがパリからメリー・ローランに宛てて書いた1893年4月12日の手紙を参照。「何と！ ナダールのところでも肖像写真はこんなものなのかい。それとも君と私は、君のことを特別な眼で見ているのだろうか(おそらく実際に君はもっと醜いのだろうか)あるいは、孔雀さん、君はポーズ下手で不自然になったのだ。君は[写真に撮られる]一瞬だけ上手くポーズをするだけでいいのに。庭ではいつだって、君にはそうした瞬間が訪れているはずなんだが。」



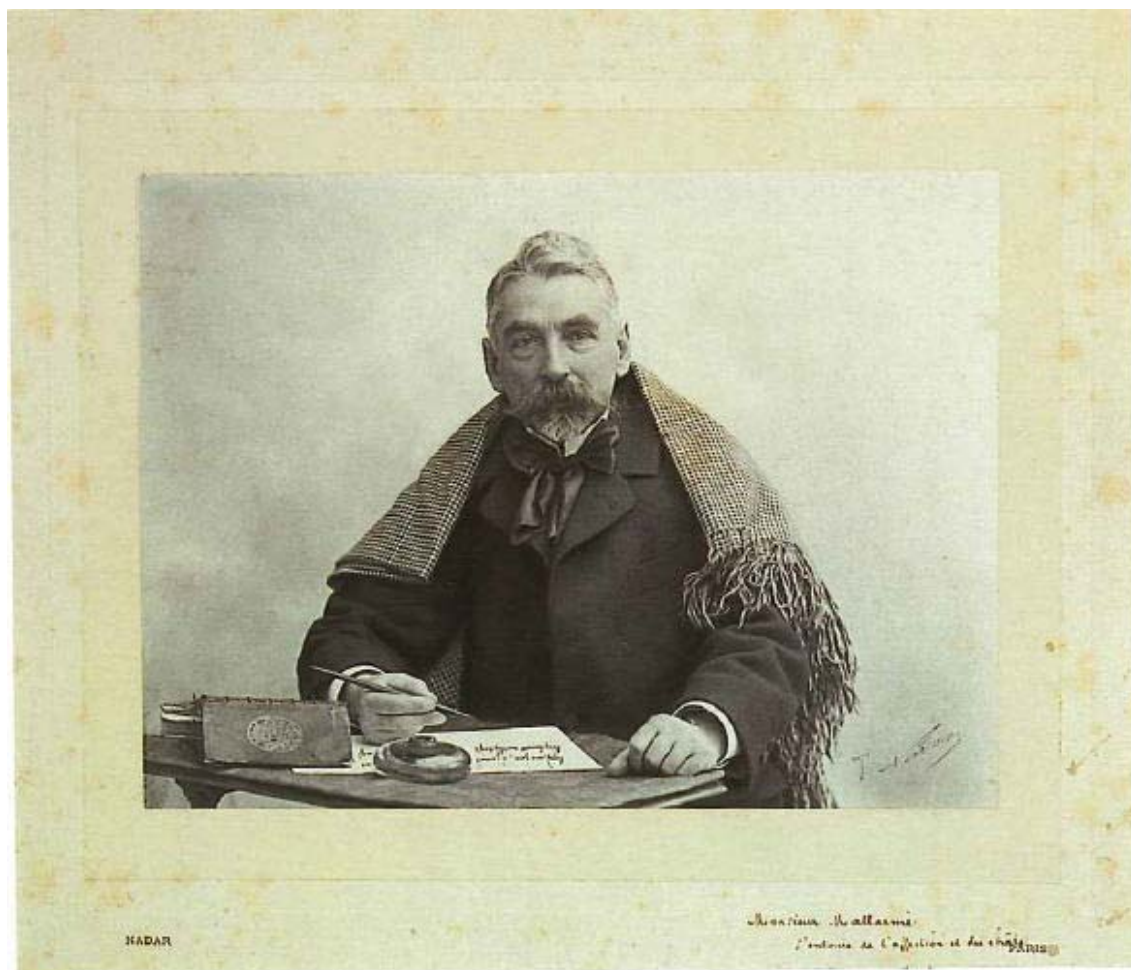
23

Cat. 23

ベンク株式会社
「着物を着て扇を持つメリー・ローラン」

写真

来歴: アンリ・モンドール遺贈、1968
パリ、BLJD、目録 MNR MS 1832



24

Cat. 24

フェリックス・トゥルナション、通称ナダール(1820-1910)
「肩掛けをしたマラルメ」

写真

オリジナル現像

18.5×25 cm

献辞、マラルメ氏 / メリー・ローランの愛と肩掛けに包まれた / SM

来歴: アンリ・モンドール遺贈、1968

パリ、BLJD、目録 ing sup 26



25

Cat. 25

作者不詳

「マラルメの二行詩が印刷された紙を巻かれた、メリー・ローランのミルリトン」

紙粘土

来歴: アンリ・モンドール遺贈, 1968

パリ, BLJD, 目録 102



26

Cat. 26

作者不詳

「メリー・ローランの扇」

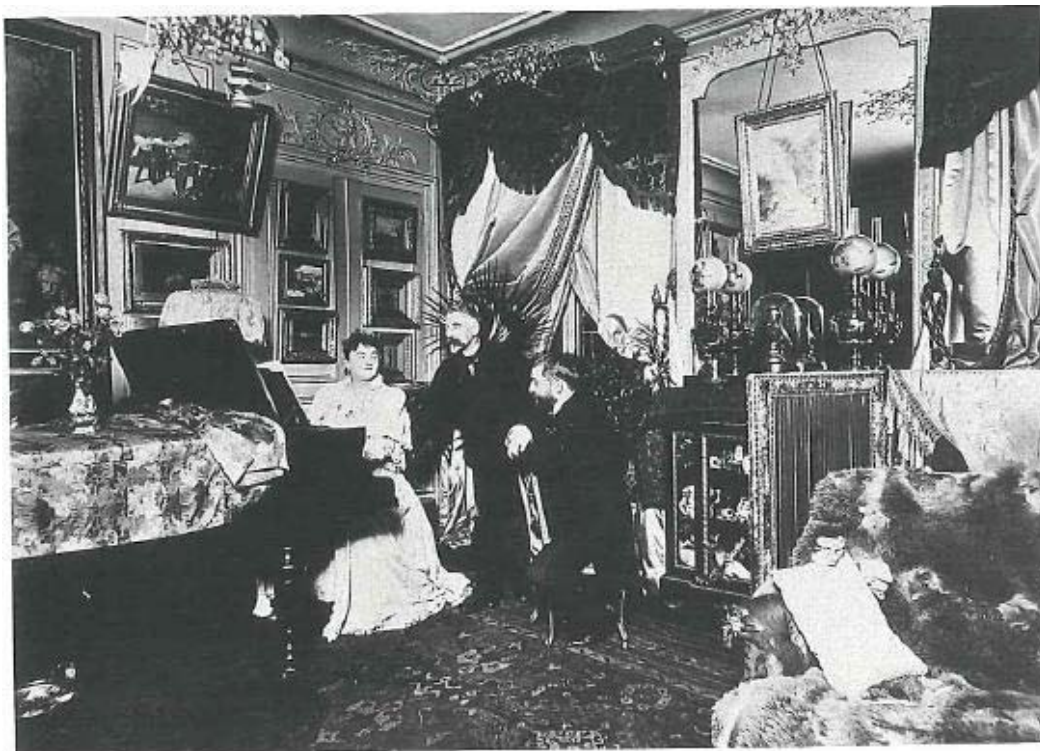
装飾を施された和紙、骨組みなし

1889

来歴: アンリ・モンドール遺贈, 1968

パリ, BLJD, 目録 96

その他の友情



27

Cat. 27

ドルナック

「メリー・ローラン宅でのマラルメ、ジェルヴェックス、メリー・ローラン」

写真

パリ、フランス国立図書館、版画・写真部門、N2 マラルメ



28

メリー・ローランはピアノに向かっている。彼女の背後に立っているのはマラルメで、彼の傍ら、アンリ、ジェルヴェックスが椅子に馬乗りになっている。左手の壁には、1867年の日付のある《マクシミリアンの処刑》(コペンハーゲン、ニ・カースルベルク・グリプトテック、48×58 cm、目録 MIN smk-3270)の下絵が見られる。そして鏡の上には、ジェルヴェックスの《ヴィーナスの誕生》(BLJD)がさがっている。これはメリー・ローランが1896年頃に手に入れたものである。メリー・ローランとジェルヴェックスはその頃隣人だった。画家は1879年から、妻とともにローマ通り62番地に住んでいた。

Cat. 28

アンリ・ジェルヴェックス(1832-1929)

「ロゼット」

灰色の紙に水彩

左下に題名とサイン:ロゼット / H・ジェルヴェックス

1892

28.5×22 cm

来歴:旧メリー・ローラン・コレクション、アンリ・モンドール遺贈、1968

パリ、BLJD、目録 91



29

Cat. 29

ジャック=エミール・ブランシュ(1861-1942)

「ステファヌ・マラルメの肖像と『独立評論』の友たち習作」

カンヴァスに油彩

右下に、サイン、献辞、日付:J・E・ブランシュ、S・マラルメ 1889
1889

61×73 cm

来歴:ジャック=エミール・ブランシュ寄贈、1932

展覧会:パリ、国立図書館、1936、「象徴主義」、no.241。パリ、オランジュリ美術館、1943、「ジャック=エミール・ブランシュ回顧展」、no.10。ルーアン、美術館、1951、「ジャック=エミール・ブランシュ肖像—パリ生活の半世紀とフランスの思想」、no.24。ブリュッセル、王立図書館、1957、「象徴主義」、no.821。「ジャック=エミール・ブランシュ、画家(1861-1942)」、カタログ、no.18、92頁-93頁、そして243頁に複製。
ルーアン、美術館、目録 923.1.16

絵では右手前にステファヌ・マラルメがおり、傍らには、ジャン・アジャルベール(1863-1947)とジャーナリストで小説家であり、雑誌『ワーグナー評論』の創設者エドゥアール・ドゥジャルダンが見える。

『独立評論』はジョルジュ・シュヴリエとフェリックス・フェネオンによって1884年につくられた。この習作が描かれた場所は不明である。そこには他にも、ヴィリエ・ド・リラダン、ユイスマンス、さらにはエドモン・ド・ゴンクール、ゾラ、ヴェルレーヌ、ジュール・ヴァレス、モーパッサン、アンリ・ド・レニエ...などの顔があったはずである。

1893年8月10日と思われる手紙のなかで、マラルメはメリー・ローランに、アジャルベールの『オーベルニュにて』を読むように勧めている。彼についてはメリー・ローランがよく引用しているし、マラルメも手紙で言及している。デュジャルダンは、この絵によればランヌ大通りの常連だったように見える。



30

Cat. 30

ドルナック

「J.-K.ユイスマンズの肖像」

写真、「自宅におけるわれらの同時代人」シリーズ

パリ、フランス国立図書館、版画・写真部門、整理番号 Eo 88b pt fo, t.1



31

Cat. 31

ジャック=エミール・ブランシュ(1861-1942)

「ジョージ・ムーア」

カンヴァスに油彩

右下に献辞とサイン、わが友 / ジョージ・ムーアへ ジャック・E・ブランシュ

1890年頃

80×64 cm

来歴: ジャック=エミール・ブランシュ寄贈、1923

展覧会: パリ、ジョルジュ・プティ・ギャラリー、1890年、第三回「三十三の彫刻家と画家の協会」展、1891、no.103。パリ、オランジュリ美術館、1943、「ジャック=エミール・ブランシュ回顧展」、no.9。ルーアン、美術館、1951、「ジャック=エミール・ブランシュ肖像—パリ生活とフランスの思想の半世紀」、no.28、複製。ディエップ、城美術館、1954、「J.=E・ブランシュ—ウォルター・シッカート、no.66。「画家、ジャック=エミール・ブランシュ(1861-1942)」、カタログ no.28、110頁-111頁、複製、240頁。ルーアン、美術館、目録 932.1.1

Cat. 32

作者不詳

「アントナ・プルースト」

写真

12.5×6.3 cm

1877

パリ、フランス国立図書館、版画・写真部門、Na 250 箱番 36



32

Cat. 33

ポール・トルーベツコイ(1866-1938)

「ロベール・ド・モンテスキュー伯爵」

ブロンズ

1907

56×62×56.5 cm

パリ、オルセー美術館、目録 RF 3476

ロベール・ド・モンテスキュー＝フゼンサック(パリ、1855年3月9日ーマントン、1921年12月11日)は、ダンディーと呼ばれるもののモデルで、ヴェルレーヌ、G・フォーレ、J・アボット、マク・ネイル・ホイスラー、マラルメの友人でもあった。レイナルド・アーンと親交があり、プルーストの『失われた時を求めて』の登場人物シャルリュスやユイスマンスの『さかしま』のデ・ゼッサントのモデルとなった。彼はその著書『フランドルの三幅対』と『消された足跡』で、メリー・ローランについて多くの証言を残した。



33



34

Cat. 34
リュシー・ランベール
「ピアノの前のレイナルド・アーンの肖像」

紙にパステル
1907
100×81 cm
パリ、国立図書館、演劇芸術部門、目録 7401-16



35

Cat. 35
作者不詳
「レイナルド・アーン」

写真
18×12.7 cm
献辞、「われらの / 友 / レイナルドの / 愛しい思い出に」
パリ、国立図書館、版画・写真部門、整理番号、Ne 101-Hahn



36

Cat. 36
ウジェーヌ・カリエール(1849-1906)
「男の肖像、伝マルセル・プルースト」

カンヴァスに油彩
46×38 cm
パリ、オルセー美術館、目録 RF 1984-136

メリー・ローランの友人たち

諸言

メリー・ローランは多く人と関係をもっていた。以下で言及されている 18 人の画家、友人、音楽家、詩人たちは、ローマ通りの彼女の自宅や、ランヌ大通りのタリュエ荘をよく訪問した人たちである。

テキストはナンシー市美術館副館長、ソフィー・アラン (S.H.) と、資料の専門家、ミシェール・レイネン (M.L.) による。

テオドール・ド・バンヴィル

(ムーラン、1823年—パリ、1891年3月13日)

詩人、評論家、ヴィクトル・ユゴーの擁護者、ランボオの文通相手、テオフィル・ゴーティエの縁者で、ヴェルレーヌから熱烈に讃美された。マネの文学や画家仲間のうちでもっとも親しい人物である。

彼は高等中学校の友人である、エドモン・ド・ゴンクールやアルフレッド・ドゥオデンクと同じように、ごく早くから画家や文学者と交際をはじめた。そして1841年からはボードレールと親交を結んだ(バンヴィルは1868年には、シャルル・アスリーノとともに、『悪の華』の死後出版に関わった)。翌年には『人像柱』を、1845年には最初の詩集『綱渡りのオード集』を出版した。1845-1847年以降は、風刺詩と、演劇や美術に関する批評で雑誌「ラ・シルエット」や「海賊—悪魔」に協力した。さらにヴィチュ、ミュルジェ、フォシュリとの手紙による最初の小説を刊行した(『ラザールの復活』)。彼は数多くの詩篇(『新綱渡りのオード集』、フランソワ・ヴィヨン風の『愉快的バラード三十六曲集』、1873年刊)を書き、戯曲作品も創作し(『ネリーヌの悪だくみ』、1865年の『りんご』、1866年の『グランゴワール』、1885年に初演され、ヴェラーランに激賞された『ソクラテスとその妻』など)、ゴングールやガヴァルニのところをよく訪れた。1862年から1865年にかけては、「芸術と文学の動向」について、雑誌「芸術家」にさまざまな記事を発表した。(この雑誌には、マラルメの、ボードレール、ゴーティエ、バンヴィルへの讃辞である《文学交響曲》が掲載されることになる)。「ナショナル」誌には10年間協力して戯曲を連載し、さらに『プロシャ風の牧歌集』(1870年-1871年)も発表した。1880年には、ドビュッシーが彼の四篇の詩に曲をつけた。1888年-1890年の間、多くの新聞が彼に紙面を提供した。(「ル・フィガロ」、「笑いの生活」、「パリのこだま」、「世界展覧会誌」などで、1889年には、ギイー・ド・モーパッサンの『19世紀の小説の進展』と対をなす、『1889年の詩の状態』という彼の記事を読むことができる。『首鈴と鈴』と『マルセル・ラブ』は、生前に発表された最後の作品であり、その後、最後の詩集『業火のなかで』(1892年6月)が刊行されたが、彼は亡くなる直前にその一冊を受け取った。

メリーがバンヴィルと親密な関係を結んでいたとは思われない。彼女はマネを介し、それ以上にマラルメを通してバンヴィルを知った。彼女は彼の詩の繊細さに感銘を受けたのは間違いないが、それ以上に彼女の親しい二人〔マネとマラルメ〕が、バンヴィルと結んでいた友情に感動したのである。1891年3月14日(詩人の死の翌日)のマラルメ宛ての手紙で、メリー・ローランは、「新聞を読みながら、あなたの可哀そうな大詩人T・ド・バンヴィルの突然の死を知りました。あなたに会いに行くのは難しいと思いますので、急いでこの短い手紙をお送りして、あなたの苦しみを私も分かち合いたいと思います。これは悲しいことですが、人生は流れていきます。もっともっと愛し合いましょう。今朝でなければ、明日にでも。メリー。」と書いている。

S. H.

ジャック=エミール・ブランシュ

()

画家であるとともに、作家、蒐集家のブランシュは、彼が交わった数多い著名人について、貴重な証言を残した。

ジェラルド・ド・ネルヴァル、テオ・ヴァン・ゴッホ、ギイー・ド・モーパッサンたち

が、その診察室を訪れた有名な精神科医の一族の出で、ステファヌ・マラルメの学生であり、エドモン・メートルの家庭教師で、彼の両親の友人だった。彼が最初にマネのサン・ストラスブール通りのアトリエや、ファンタン・ラトゥールの許を訪れたのは(1875年)、マラルメに同伴されてのことであった。彼は絵画の蒐集をはじめ、モネやセザンヌの風景画を購入し、1884年のマネの作品の売り立てでは数点の絵を買った。1882年5月の「フランス画家のサロン」に初めて出品し、ルノアールやドガと交際し、ジェルヴェックスについてレッスンを受け、エルーやロダンの許を訪ね、ホイスラーやウォルター・シケールと交わるようになった。やがてこの二人は親友となる。そしてジェルヴェックスと同じく、ポトカ皇女邸に集うマカベ・グループに加わることになる。

彼は風景画とともに肖像画(マリー・カサット、グレフュール伯爵夫人、ガブリエル・フォーレ、ピエール・ルイス、ヘンリー・ジェイムズ、ニジンスキー、ストラヴィンスキー……)を描き、パステル画やドライ・ポイントで版画を制作した。彼はデュジャルダンの「ワーグナー評論」や「独立評論」など多くの雑誌に協力し、大勢の人と友情をむすんだ(R・ド・モンテスキュー、A・ジッド、ジョージ・ムーア——彼はブランシュに『若い英国人の告白』を献じている——、ドビュッシー、ボルディニ……)。そしてジョルジュ・プティの画廊での33人展や、メッソニエによって創設された「芸術家国民協会」に出品した(1890年)。1891年には同協会の秘書となった。1900年の万国展覧会では金メダルを受賞した(《画家ソロウと子どもたち》)。彼は疲れを知らない旅行家であり、アカデミー・ラパレットの教授であり、雑誌「エクセルシオール」に執筆するジャーナリストだった。彼はまた装飾的作品を手がけるとともに、「バレー・リュス」のためにも仕事をし、著述もはじめた(1922年3月には、自身の描く50点の挿画とともに、小説『エメリ』が出版された)。彼の日記である『ある芸術家のノート』は、出版(1914年)される前に雑誌に掲載された。〔第一次〕大戦後はもっぱら著述に専念した。(『サン・アマランの鐘』、『絵画について』、『天使のすべて』、『ディエップ』、『エミリエンヌと母性』)。

彼の人生の終わりは栄光につつまれていた(1924年にはパリのジャン・シャルパンティエのところで回顧展が催され、レジョン・ドヌールを叙勲し、1935年には学士院会員に選ばれ、国立美術学校の審査員のメンバーとなった)。さらに回想録も出版された。彼はルーアンの美術館に多くの絵を寄贈し、絵を描くことをやめたのは1940年のことである。

画家自身の証言によれば、メリーは彼のアトリエの常連であり、隣人として定期的に訪ねてきたという。ブランシュは彼女の肖像は描かなかったが、逆に彼女の訪問客や二人の共通の友人を数多く描いており、回想録には彼女のことを引用している。

S. H.

ジョン・ルイス・ブラウン

(ボルドー、1829年—パリ、1890年11月14日)

アイルランドの出身だが、17世紀末にボルドーに定住した一族の一員で、J・L・ブラウンの絵はなかば独学だった。とくにユジェーヌ・ドラクロア、さらにジェリコーの作品に魅了され、間違いなくロックプランとベロックの助言をうけていた。彼は1848年の官展にはじめて作品を出品した。次は1859年の官展で、このときからは毎回出品した。1863年の「落選展」にも作品を出し、次いでロンドンの「印象派協会」展に出品した。さらに1903年のリュクスアンブル美術館(版画)と、1929年のパリの画廊とで、二度の回顧展が催された。

彼は主に馬や戦場、競馬場の優雅な風景などを描いた画家で、社交生活を描き、印象派の画家の多く、とくにマネとは親密な関係を結んだ。ベルト・モリゾ宅で木曜日に開かれる夕食会の常連で、ボルディニとマラルメとはとくに親しかった。マラルメは自分の著書『漆塗の抽斗』の表紙の絵を彼に依頼して、そこにメリー・ローランの肖像を描いてもらうことを考えていた¹。

S. H.

1. マラルメがメリー・ローランに宛てた、1888年7月15日付の手紙を参照。「愛しい人 / 同じ時間に到着することを望むかい？ J・L・Bは今週出発し、私たちも間もなくだが、でもそうはならないだろう。というのも、分かるだろう、私が執着しているからだ！——なぜなら、君を描くのは一瞬の仕事ではなく、一人アトリエでする仕事だからだ。着るのはどんな服でもいい、君ならなんでも薔薇に変えてしまうから・・・」

フランソワ・コペ

(パリ、1842年—1908年)

コペは戦争省の一雇員として経歴をスタートさせた。彼は芝居の作者か、詩人として名をなすことを望んだ。だがテオドール・ド・バンヴィルやルコント・ド・リールなどの高踏派に触発されたその詩は、大衆受けをしなかった。謹厳な書き振りの詩集『聖遺物匣』がその証である。彼が名をなしたのは芝居のお陰で、1869年の戯曲『行人』は大成功をおさめた。高踏派を離れた彼は、大げさな表現を避け、日常的な現実近づき、作品は素朴な人間的感情と価値を称揚するものとなった。

1878年からはコメディエ＝フランセーズの記録保管人となり、1884年に学士院会員に選ばれるまで、この職にとどまった。ドレフュス事件に際しては、反ドレフュス派に加わり、バレスとともに反ユダヤ組織である祖国フランス同盟の発起人となった。

メリー・ローランはパリの文学カフェをよく訪れ、そこで多くの詩人たちと出会ったが、コペは最初の詩篇を彼女に捧げた。こうして彼女はコペとじつに長い間、関係をもつことになった。その詩は、「いかなる神が貴女をつくり、どれほど私は貴女を望んでいることか、そして何ものも、貴女の髪の毛の黄金や、翳のある優しい貴女の眼ほど、私を眩ますものはない、私の情熱はそこに泉を汲むのだ。私と同じく貴女にも欠点はあるだろう、でも私が愛するのは貴女、そして貴女も私を愛してくれるに違いない・・・」と詠っている。

二人の大量の手紙の大部分は未公開で、現在はジャック＝ドゥーセ文学文庫に保存されている。

M. L.

アンリ・ジェルヴェックス

(モンマルトル、1852年9月10日—パリ、1929年6月7日)

ジェルヴェックスはカバネルと東洋学者フロマンタンの生徒で、20歳のときに、『巫女と戯れるサチュロス』で官展に認められ、国家に買い上げられて、リュクサンブール美術館に展示された。若くしてルノアールと親交を結び、ルノアールは彼を、『ムーラン・ド・ラ・ギャレット』のモデルの一人にした。またドガとも交際し、マネとは1876年に知り合い、

マネは彼が官展に展示されるように尽力した。二人の友情は大変熱いもので、ジェルヴェックスは、1884年の国立美術学校でのマネの回顧展の開催と、国が《オランピア》を買い上げるのに尽力した。彼はまたロダン、エルー、ブランシュ、さらに1865年に出会ったギー・ド・モーパッサンとも親しかった。

生き生きとして、知的で数多くの女性（そのうちのドゥミ・モンデーヌがヴァルテス・ド・ラ・ビーニュである）を征服したことで知られる。ジェルヴェックスは成功とともに、1878年の官展に展示された《ローラ》（ボルドー美術館蔵）が巻き起こしたようなスキヤンダルに包まれた輝かしい経歴をかさねた。彼は社交界の人たちの肖像や、「写真のような」リアリズムの手法による大作（《サン・ルイ病院で手術をするペアン博士》、1887年、公共支援美術館蔵）とともに、公共施設（パリ市役所、オペラ・コミック座のロビー、エリゼ宮の天井）の装飾を得意とした。もっとも野心的な作品は、1889年の万国博覧会のための《世紀のパノラマ》である。

若い芸術家の一団（J・E・ブランシュ、アルフレッド・スティヴン、エルー、ボルディニ・・・）は彼の周りに集まり、彼と一緒にイギリスへ旅行し、彼の仲介でホイスラーやジョージ・ムーアと交流した。ジェルヴェックスはまた、マチルド皇妃、なかんずくポトカ伯爵夫人のサロンの常連で、ジュール・フェリー、ワルデック＝ルソー、レオン・ガンベッタ、あるいはアントナン・プルーストなどの共和国の著名な政治家、「ニューヨーク・ヘラルド」の所有者であるジェイムズ・G・ベネットといった、金持ちで影響力のある人物とも親しかった。ゾラとの交友では、作家が『制作』中のファジュロールの人物像をつくりあげるのに影響をあたえた。彼は美術国愛協会の設立メンバーの一人でもあった。

1913年、彼はエメ・モロに代わって学士院入りをはたした。その翌年から、彼は《負傷兵を載せた列車》（パリ、軍事博物館蔵）のような、愛国的で、新聞などで人気を博す作品を描くようになった。人生の最後の時期は、パリと夏はヴィルレやドーヴィを行き来してすごした。したがってこの時期に描いたのは、もっぱら社交界や高級服の世界である。レジョン・ドヌール勲章の、シュヴァリエ、オフィシエ、コマンドールを次々に授与され、1929年には国葬をもって遇された。

メリーとの関係は1890年代から資料に残されているが、とても親密なものだったように見える。画家は彼女を何度も描いており（その肖像画の一点はジャック・ドゥーセ文学文庫に保存されているが、これは1892年の官展に出品されたものである。整理番号 no.452、エヴァンス博士の肖像は no.450）。彼は定期的に隣人であったメリー・ローランを訪問した（メリーはローマ通り 52 番地に住み、ジェルヴェックスの住所は 62 番地であった）。マラルメが画家を知ったのは、おそらくメリーを介してのことである（cat.27 を参照）。

S. H.

レイナルド・アーン

（カラカス、1874/1875年ーパリ、1947年）

「最初のドから最後のドまで
レイナルドの指が滑って行く・・・」
ステファヌ・マラルメ

カラカス生まれのレイナルド・アーンは、1878年に家族とともにパリにやって来た。1885年にパリのコンセルヴァトワールに入学した早熟な音楽家で、豊かな才能をもったピアニストであって、13歳から曲をつくった。1890年から、クレオ・ド・メロードとドーデー家

の許をよく訪れ、ドーデ宅ではポール・ヴェルレーヌもいるなかで最初の演奏をした。

彼は早い時期に、ゲルヌ伯爵夫人やマチルド皇女、あるいはマドレーヌ・ルメール（彼女たちはブルーストのヴィルパリジス夫人とヴェルデュラン夫人のモデルとなった）のサロンで、ステファヌ・マラルメとエドモン・ド・ゴンクールと出会った。彼はそこでマルセル・ブルースト（1894年）やカチュール・マンデスとも知り合った。

メリー・ローランと出会ったのも同じ時期である（アーンは1897年4月21日に、ボディニエールで特別のコンサートを催したが、この場ではマラルメの『諸言』がマルグリット・モレノ嬢によって朗読された。このコンサートについては、マラルメが1897年4月のメリー・ローラン宛ての手紙で触れている）。さらにここには、カチュール・マンデスに連れられて、彼の友人だったオーギュスタ・オルメスも来ていた。ホイスラーの面識を得たいと望んでいたマルセル・ブルースト（1871—1922）が、メリー・ローランと知り合いになったのは、多分R・アーンのお陰である。彼女が将来スワン夫人となるオデット・ド・クレシーの人物像の一部をつくりあげるのに与ったのは間違いない。さらに『失われた時を求めて』のなかで、エステルがオデットの女優としての過去と、彼女のミス・サクリパン役、『ヴァリエテ座のレヴュに出ていたかつての若い女優』を思い出すところは、メリー・ローランのことを思わせる。作者は『スワンの恋』で、タリュ荘のことを長々と描写しているが、そこでは生き生きとした雰囲気と日本趣味を描きだしている。

彼の成功は、1898年3月23日にオペラ・コミック座で初演された『夢の島』の創作にはじまり、『カルメル会修道女』（1902年）、幾つかのオペレッタ（『浅葱』、1923年）、さらにイヴォヌ・プランタンとアルレッティへの音楽劇と結びついている。彼はまた数多くの歌曲やピアノ曲を書き、歌という芸術に熱終して多くの曲をつくり、講演も行った。1910年代には、ディアギレフに協力して、「バレエ・リュス」の4度目のシーズンのために曲をつくった（『青い神』）。さまざまな新聞・雑誌（「ラ・プレス」、「ラ・フレッシュ」、「フォエミナ」、「レクセルシオール」）に音楽評論を寄せ、オーケストラの指揮者としてヨーロッパ中を旅行し、1919年の創設されたパリ国立音楽学校で、パブロ・カザルスやナディア・ブーランジェと並んで教鞭をとった。第2次大戦後は学士院会員に任命され、パリ・オペラ座の責任者となった。

1898年11月23日の2回目の遺言書で、メリー・ローランはレイナルド・アーンを彼女の遺言執行人兼受遺者とした（銀行預金の半分と接収されるタリュ荘の売却代金）。音楽家は、180,000フランと、メリー・ローランが飾っていた絵の一部を相続した（他の相続者にはジュヌヴィエーヴ・マラルメその他大勢がいたが、[お手伝いの] エリザ・ソセは60,000フランとローマ通りの動産を譲られた）。

S. H.

ジョゼ・マリア・ド・エレディア

（ラ・フォルチュナ、キューバ、1842年11月22日—シャトー・ド・ブールドネ、セーヌ・エ・オワーズ県、1905年10月2日）

フランスの詩人。母はフランス人で父はキューバ人。ジョゼ・マリア・ド・エレディアはハバナで学んだあと、1861年にフランスに定住して学業を続けた。シャルトルの学校で学んだせいで、彼はたしかに歴史的・文学的素養を身につけ、それが彼の詩作品を養った。

1860年代に誕生した高踏派は、彼の初期の作品に影響をあたえた。高踏派は何よりも形式を追及することで、古典的伝統と和解しようとした。それは没個性的な美の讃美であり、

古代風の、あるいは遠方の主題を探し求めることだった。エレディアは、詩でギリシアやシシリア、あるいはオリエントといった、消え去った文明や国々を詠っている。

彼は「両世界評論」、「ル・タン」、「論争新聞」などに協力し、詩以前に散文を発表した。彼の詩の多くは 118 篇のソネからなるが、それらは 1893 年になって、ようやく『戦捷牌』としてまとめられた。

1894 年にモーリス・バレスの後任として、フランス学士院会員に選ばれ、フランソワ・コペの歓迎の辞で迎えられた。

M. L.

オーギュスタ・オルメス

(パリ、1847 年 12 月 18 日—1903 年 1 月 28 日)

メリー・ローランのまさに同時代人で、もっとも親しかった友人の一人である。オーギュスタ・オルメスは、1866 年にヴェルサイユで行った演奏会の成功以来、栄光の道を歩んだ。1869 年からは、ジャーナリスト、複数の新聞の編集責任者で、高踏派の活動的メンバーだったカチュール・マンデス(1841—1919)の同伴者となり、1870 年代初頭以後、作曲家セザール・フランクの親しい仲間の一人となった。リスト、ワーグナー（彼女は真に崇拜の念を捧げることになる）、シャルル・グノー、カミーユ・サン＝サーンスの友人で、1880 年代には多くの交響乐的詩篇を書き、1889 年の万国博覧会のために、『勝利のオード』をつくった（これは 1889 年 9 月 11、12、14 日に、エドゥアール・コロンの指揮でシャンゼリゼ宮殿で演奏された）。1895 年には、彼女のオペラ『黒い山』があまりにワーグナー風だと批判され、手痛い挫折を味わった。

A・オルメスとメリー・ローランが友情を結んだのはこの時期で、それ以来大量の手紙がやり取りされた。そのほとんどは、現在、国立図書館、ジャック＝ドゥーセ文学文庫（1889 年 7 月 3 日から 1893 年 7 月 3 日の間のもの¹⁾）そしてヴェルサイユ図書館(A・オルメス遺贈)に所蔵されている。二人の女性は日常生活について無数の逸話を交換しあった。彼女たちの手紙には、店の住所、流行についての考え、化粧品のやり取り、あるいは彼女たちそれぞれが征服したのものについての暗示が潜んでいる。メリー・ローランは手紙で、彼女の友が提供してくれる、あらゆる種類の詩を書いて教えてくれるように頼んでいる。

マラルメはカチュール・マンデスを介して、1871 年に彼女と出会ったが、彼もまた筆まめに手紙をくれ、親しい友人となった。オーギュスタはデ・モワヌ通りのニナ・ド・ヴィヤールのサロンの常連で、そこで Fr・コペ、ヴィリエ・ド・リラダン、ヴェルレーヌ、ジョージ・ムーアたちと交わった。彼女はサロンでときどき歌い、のちにはメリー・ローランのところで自分の作曲した歌を披露した。

S. H.

1. メリー・ローラン宛てのオーギュスタ・オルメスの手紙は、MNR、MS 1710 から 1725。

ジョリ＝カール・ユイスマンス

(パリ、1848 年—パリ、1907 年)

オランダの版画家の息子。小説家で美術評論家のユイスマンスは、『香料箱』（1874 年）、

『マルト、一娼婦の手記』(1876年)、『所帯』(1881年)、『流れのままに』(1882年)などの著書で、自然主義の作家として注目され、ゴンクールとゾラに認められた。印象派の擁護者で、彼は早くから評論でセザンヌとドガを支持した。

彼は同じくマラルメとヴィリエ・ド・リラダンと交遊し、1884年の『さかしま』を刊行して、自然主義を離れて、フェリシアン・ロップス、オディロン・ルドン、ギュスターヴ・モロなど象徴主義の人たちに近づいた。本質はペシミストで、やがて悪魔主義の方へ向かい(『彼方』、1891年)、その後カトリックを信じるようになった。ここから『出発』(1895年)、『大聖堂』(1898年)、さらには『修道士』(1903年)が生み出された。

ユイスマンスは小説と詩以外にも、美術評論を、「文芸共和国」、「ブリュッセル・ニュース」、「ル・ヴォルテール」などの新聞や雑誌に掲載した。彼はそこで、ドガやマネなどの近代画家を、「[彼らは] 新たな方法、奇抜だが真実の芸術のセンサーであり、オランダの自然主義者のように、彼らの時代の本質を蒸留している」と述べている。彼はまたホイスラー(彼には「独立評論」と「現代美術」で批評を献じている)についても、多くのことを明らかにしている。そしてジェルヴェックスとは、メリー・ローランのサロンで、マネやマラルメとともに出会った。メリー・ローランの近い友人で、彼女とはオカルト学に対して同じ関心を抱いていた(これについては、マラルメのマリー・ローラン宛ての1892年9月15日の手紙で言及されている)。「今日は、孔雀夫人、貴女は「悪魔主義」で、その可愛い頭を少々逆上せさせているね」。ユイスマンスはこの女主人について、「覚書」のなかに数多くの記述を残している。「夕食、今夜メ[リー]と、新たな屋敷で二人だけで。彼女は葉巻を二本吸う間に、その人生を語った。彼女の母親はカン[ロベール]の家の洗濯女だった。15歳で彼のものとなり、彼によってある農夫と結婚させられたが、彼は117,000フランを残して死んだ。それが彼女の財産となった。愛情はまったくなく、彼の許を去って——若い男と生活した——愛人だったと彼女は言った。彼は彼女と結婚したが——その後、彼女を歯の治療のために、エ[ヴァン]スのところへ送りこみ、彼にも十分の手当てをよこすように要求した。彼は一本の歯の治療でひと財産つくったのである。その後もカン[ロベール]の要求は続き、月に500フランを払わせた。彼女は、マ[ラル]メがどんなに彼女の愛人になりたがっていたかを、私に話した。・・・」

M. L.

1. ユイスマンスの緑色のノートは、P・ランベールのコピーは、アルスナル図書館蔵。

ステファヌ・マラルメ

(パリ、1842年3月18日—ヴァルヴァン、1898年9月9日)

「・・・きみは本当に希れな女性だよ、孔雀さん、……。私はきみに抱くときめく気持は、誰にも感じることはできない¹。」

詩人で、文学と芸術の批評家であるステファヌ・マラルメは、1862年に記事と詩を発表しはじめ、ウジェーヌ・ルフェビュールとアンリ・カザリスと手紙をやり取りするようになった。英語を教えながら書くことに専念し、最初の散文詩を発表する(そのうち11篇は、1866年5月、『現代高踏派』)。さらにヴェルレーヌと一通の手紙を交わす。彼は教師の職業を放棄することなく、散文作品を「文芸・芸術評論」に発表し、多くのソネを書き、国際博覧会を取材するためにイギリスへ行った。そしてフランソワ・コペ、カチュール・マ

ンデス、ジュディット・ゴティエ、ヴィリエ・ド・リラダン、ランボーと交じわり、1874年には短命に終わったが雑誌「最新流行」の出版にたずさわり、一人ですべて（全8号）の記事を書いた。次いで多くの出版と、彼が賞賛してやまなかったE・A・ポーの詩の翻訳に協力した。1877年からは、マラルメ宅での火曜日の集まり〔火曜会〕がはじまり、V・ユゴーの知遇をえた。オスカー・ワイルドや若いポール・ヴァレリーと親しくなり、彼は種々の定期刊行物（友人のデュジャルダンの「ワーグナー評論」「芸術とモード」、演劇時評を「独立評論」、そして1892年から1893年には、時評を英国の「ナショナル・オブザーバー」へ、さらには「白色評論」など）へ多くの記事を書いた。1890年には、フランス国内と外国で講演してまわった（1890年にはヴィリエ・ド・リラダンに関する講演をベルギーで、さらにオックスフォードとケンブリッジでも〔『音楽と文芸』と題した講演を〕）。

1873年、詩人でピアニストのニナ・ド・カリアス(1845?–1884)の知り合いだったことからマネに出会った。彼女のサロンはあらゆる才能の持ち主を惹きつけたのである。官展が1874年と1876年にマネの作品を拒否したとき、マラルメはマネを擁護した。詩人は同じ年に、『象徴派の人たちとエドゥアール・マネ(The Impressionists and Edouard Manet)』という文章を書いて、[イギリスの]「月刊評論」に掲載した。二人の友情と協力はマネの死まで続き（これを通してマラルメはゾラを知った）、共同して、E・A・ポーの『大鴉』の插画入りの版(1875年)や『半獣神の午後』(1876年)、さらに1881年にはポーの『詩集』を出版した。マラルメがメリー・ローランと交際するようになったのは、おそらくはマネを介してである。心の友、靈感をあたえてくれる女性、心を打ち明けられる人として、彼女はマラルメの生涯のなかで、死にいたる15年にわたり特別の位置を占めていた。幾つかの詩は彼女に献じられており、その他のソネ、《焰のように燃え上がる髪が・・・》、《時の香りを漂わすどんな絹地も》《美しい自殺を勝ち誇って逃れ》、《時の香りを漂わすどんな絹地も》《君の物語に踏み込むには・・・》のような多くのソネ、あるいはコント『偽りの夜更かし』（《孔雀の尾に似たマトウラの王国では・・・》）にも、彼女の存在は表現されている。さらに四行詩である「状況詩」（一種の謎々で、名宛人の住所氏名を読み込んだ四行詩が、その形体に適した封筒に書かれている）はメリー・ローランに負うところが多い。彼女が社交界での遊び、ないしサロンでの一種の芸として示唆し、あるいはアイデアをあたえたのであろう。エドモン・フルニエ博士は、マラルメに『インドの物語』の執筆を注文したが、本当に依頼主は彼女だった。これは1878年にルルーから出版された。メアリー・サマーの『古代インドの伝説と物語』を再構成して書かれたものである。

メリー・ローラン²（1894年10月13日付のメリー・ローラン宛てのマラルメの手紙にある）「一番親しく、一番美しい友」は、最初の遺言書で、彼女が所有するマネの作品（思ひ出の品）のすべてをマラルメに贈ることにした。詩人の死後は、その大部分をマラルメの従兄弟であるヴィクトール・マルグリットへの贈り物とした。

S. H.

1. ジャック・ドゥッセ文学文庫に所蔵されているマラルメからメリー・ローランに宛てた手紙で、おそらくは1889年8月9日にヴァルヴァンで投函された。
2. 彼女の最初の遺言書では、メリー・ローランの忠実な小間使だったエリザ・ソセは用益権の受遺者に、また芸術家の孤児のための協会は、虚有権〔管理権・受益権のない所有権〕の受遺者に指名された。ランヌ大通のタリュの家は、「マネ以外」の絵とともに、彼女の若い愛人の一人、エドモン・フルニエのものとした。ナンシーに住むラボンテ姉妹（マリー＝ロジーヌ・ブレッシュ、通称ラボンテは、ナンシー市スタニスラス通り8番地に、手芸と服飾品の店を持っていた。彼女の名前はメリーの姉のエリザベット・シャルロットとともに、メリー・ローランとマラルメとの間で交わされた手紙によく出て

くる)も同じく受益者だった。彼女の代子であるロベール・ジャン・エドモン、マラルメ家、フランソワ・コペも同様である。1891年10月9日の最初の遺言補足書では、ポール・ポルタリエ(彼女の取り巻きの一人だった医師)を遺言執行人としている。1896年1月9日の第二の遺言補足書では、メリー・ローランがナンシーのリュシアン・キュエノに、エドゥアール・デタイユの戦争画一点をあたえること、ブルデルの大理石彫刻に言及し、さらに彼女を描いたマネのパステル画をアントナン・プルーストに贈ることを明記している。

エドゥアール・マネ

(パリ、1832年—パリ、1883年4月30日)

マネの豊富な経歴にあって、メリー・ローランは特別な位置を占めている。女友だちで、最後の数年は女神であり、幾つもの繊細なパステル画のモデルとなり、画家の関心をより身近なテーマ(果物や花といった生物)や《女性的なもの》へと導いた。マネはトマ・クチュールの「反抗的な」弟子であり、ハルスとヴェラスケスを讃美し、1876年の官展で拒否されると、《洗濯》と《芸術家》を彼自身のアトリエで展示したが、そこで二人が出会った「神話」は幾度となく語られた。同じく1863年の官展で、《草上の昼食》の展示が拒否されたが、この時期のマネは間違いなく印象主義の主導者の一人だった。生涯の最後の8年間、マネは定期的にメリーと文通し、人びとは彼女を伴ったマネに、「ヌーヴェル・アテネ」や「トルトーニ」でよく出会った。こうした当時有名だったカフェはパリの文化的生活の中心だった。メリーは彼を魅了し、彼を常連だった婦人服店に伴い、新たなパトロンにした。マネは彼女をカチュール・マンデスや、親友の一人であるマラルメに引き合わせた。マネはこの美しい同伴者の肌の色、優雅さ、陽気さを愛で、《フォーリー・ベルジュールのバー》(1882年)の登場人物の一人として描いた。絵の中の彼女は、後景左手に描かれ、白い服を着てオレンジ色の手袋をはめている。そして彼女は《秋》(1883年)の主題となったのである。少なくとも画家の9点の作品がメリーの個人コレクションとなり、そのなかには《マクシミリアン皇帝の処刑》の下絵も含まれていた。彼女がマネに寄せた親愛の情は決して消えることがなかった。

S. H.

ポール(ラグア、1860年—オスゴール、1918年)とヴィクトール(ブリダ、1866年—モネステイエ、1942年) マルグリット

セダンで死んだジャン＝オーギュスト・マルグリット将軍(1823—1870)とウドクシー・マラルメの間の息子たちで、兄弟は二人ともジャーナリストで作家だった。ポールはラ・フレッシュの軍高等中学校に通ったあと公共教育省に入省した。これと平行して著作活動に身を投じ、二つのパントマイム、『妻殺しのピエロ』(自由劇場、1882年)と『許された小鳩』(綱渡り座、1888年)を書いた。彼はF・シャソールと並んで、この分野をふたたび盛んにすることに貢献した。ジャーナリストとしては、「パリの木霊」紙や(マラルメはメリー・ローランに宛てた1894年10月の手紙のなかで、ポール・マルグリットが、『ヴァルヴァン劇場』に関して同紙に書いた記事について触れている)、「ル・フィガロ」紙(彼はP・ボヌ

タン、J・H・ロニー、L・デカーヴ、G・ギッシュとともに、ゾラに反対する「五人宣言署名組」を載せたに協力した。アカデミー・ゴンクール会の会員で、「十人」（実際は七人）の第一回の会合に出席した。この会合は1900年4月7日に、パッシーのデカン通り11番地のレオン・エニックの家で開かれ、ユイスマンス、オクタヴ・ミルボー、ロニー兄弟、レオン・エニック、ギュスタヴ・ジュフロアが参加した。

弟のヴィクトールは、メリー・ローランと定期的には手紙を交換していたように見える。親戚の一人であるマラルメは、「ヴィクトールは・・・タリュ荘とそこのご婦人たちに逢えるのに有頂天です」と、メリー・ローラン宛ての1892年10月2日付けの手紙で書いている。彼は植民地軍の将校だったが、1896年には退職し、このときから1907年まで、兄とともにさまざまなテキストと短篇（『ヒカゲミズ』、1896年）、二篇のエッセー、三つの戯曲、『災禍』（1898年）、『新しい女たち』（1899年）、『剣の一振り』と『勇敢な人びと』（1901年）、『コミュニケーション』（1904年）など十二篇の長篇小説を書いた。ヴィクトールの進歩主義的思想が『ギャルソンヌ』（1922年刊。1926年にはK・ヴァン・ドンゲンによって挿画が描かれた）の発想の源にあった。これは性の解放のモデルとなったが、スキャンダルをまき起こし、作者はレジョン・ドヌール勲章を取り消されることになった。彼はさらに、『君の身体は君のものだ』（1927年）と『我らは平等』（1925年）を創作した。この時期には、『犯罪者』（1925年）、『人間的な祖国』（1931年）、さらに次の年には『生きている者よ立て』が発表されるが、読者はこの作者の揺れ動く意見と、盲目的な平和主義について行くことが次第に難しくなった。

S. H.

ジョージ・ムーア

（ムーア・ホール、バリーグラス、1852年—ロンドン、1933年）

アイルランドの裕福な家族の出であるG・ムーアは、バーミンガムで勉学をはじめ、その後1873年にはパリへ行き、カバネルとアカデミー・ジュリアンで美術を学んだ。彼は早くから自らの文学的資質に気づき、絵画を捨てて、定期的にゾラ、バルザック、エドゥアール・デュジャルダン、マラルメなど・・・さらにはやがて親しくなったジャック＝エミール・ブランシュ(cat.31)や、1879年に三点の肖像を描くことになるマネの許を定期的に訪れた。1882年にはイギリスに定住し、詩集を発表し（『情熱の花』1877年、『パゴン詩集』1881年）、次いでゾラの自然主義に影響された短編や長編、たとえば、『当代の恋人』（英語1883年）、『芝居がかった女』（フランス語1885年）、あるいは『エスター・ウォーターズ』（英語1894年）を刊行した。象徴主義、次いでユイスマンスの神秘的理想主義に興味をひかれて、自伝にも手を染めた。『ある若い英国人の告白』は英語とフランス語で同時に出版され、後には『わが死せる生の思い出』（1906年）も書かれた。

1901年、ムーアはイギリスを去ってダブリンへ行き、そこでアイルランド文学の主唱者となり、J・M・シング、レディー・グレゴリー、W・B・イエーツとともに、アイルランド文学演劇運動に積極的にかかわった（彼は1901年には戯曲『ダイヤモンドとグラニア』を書いた）。1911年にはロンドンに住んで、豊かな文学的成果を生みだし続けた（『歓迎とさよなら』1911年—1914年）。

1897年4月29日にヴァルヴァンからメリー・ローラン宛てに投函された手紙で、マラルメは、「サモアの住人であるデュジャルダン一家のところで、ムーアと一緒に夕食をとった。彼は森〔フォンテーヌブロー〕の周囲を散歩している間、カケスと呼び寄せるために、

君の名前を甲高い声で叫んでいたよ」と伝えている。メリー・ローランの許をよく訪れ、彼女を讃美していたジョージ・ムーアは、『公言』と『わが死せる生の思いで』のなかで、彼女について多くの文章を残しているが、そこではその美しさとともに、生きること喜びを感じる彼女の姿に触れている。美しいメリー・ローランに、『わが死せる生の思いで』で、彼女に「豎琴そのもの」というユゴー風の渾名を献じたのは彼である。

S. H.

アントナン・ブルースト

(ニオール、1832年3月15日—パリ、1905年3月22日)

エドゥアール・マネの少年時代の友で、マネとともにパリのトマ・クチュールのアトリエに通った。アントナン・ブルーストはまずはジャーナリストとなり（1864年には反皇帝を標榜する新聞「週刊」を創設し、これはブリュッセルで刊行された。次いで「タン」紙の特派員として仕事をした）、1876年にはドゥ＝セーヴルの共和派議員、ガンベッタの秘書、そして新聞「共和派」の創設者となった。彼は美術大臣をごく短期間つとめたが（1881年11月—1882年1月）、これは大きな意味をもった（1882年にルーヴルの学校をつくった）。彼はマネに四季を描く一連の作品を注文し、これにはナンシーの美術館にある《秋》も含まれていた（cat.14）。1884年にマネの回顧展を主導して組織したのはブルーストであった。1889年の万国展覧会の委員をつとめたが、パナマ運河をめぐるスキャンダルに巻き込まれた。1905年には病気になり自殺した。マネとの友情の思いでは、「白色両論」に連載され、次いで本として刊行された（1913年）。そこにはマネとメリー・ローランに関する覚書と物語の数々が記されている。

S. H.

アンリ・ド・レニエ

(オンフルール、1864年—パリ、1936年)

アンリ・ド・レニエは法律を学んだあと、詩と文学を目指した。まずヴィクトル・ユゴーの、次いで高踏派の詩人たち（たとえばジョゼ・マリア・エレディアや、その娘で自身もジェラルド・トゥヴィルの筆名を用いた詩人マリーと1896年に結婚した）の影響をうけた。その後はマラルメのサロン〔火曜会〕に足繁く通い、そこで多くの芸術家と出会った。彼は象徴派の若い世代のなかでも、師〔マラルメ〕から評価された一人だった。彼は急速に文学界のなかで地位を占め、メリー・ローランのサロンをよく訪れた。

レニエは現代美術に興味をもと、ホイスラー、ベルト・モリゾ、シニャックのような新印象派を賞賛し、シニャックとはアナキズム思想を共有した。

多くの雑誌や新聞（「リュテース」、「芸術文芸」、「今日の人物たち」、「ル・フィガロ」）に協力し、多くの詩集（『翌日』1885年、『夢の中でのように』1892年）、批評、長編小説（『二重の情婦』1900年）の著者でもあった。1911年には、フランス学士院会員に選ばれた。

1900年の少し前、メリー・ローランは彼に詩、「マネを知るある夫人に捧ぐ」（『炎の痕跡』所蔵）の靈感をあたえた。

《夫人よ、私は少し後で
あなたを知った、それはもう
かつてマネが描いた
湯浴みする裸の女性ではなかった

そこでは、四囲にペルシャの布が張られ
天井のバラ型の装飾の下で、
スポンジから、丸い盥の水が
肩に流れていた

二枚の肖像画では、そのモデルたちが
描かれた美しさを、
あなたに提供していた
それこそ絵にとっての荣誉だった。

一つはトック帽を眉毛まで被った
あなたの姿を見せていた・・・》

M. L.

オルタンス・シュネーデル

(ボルドー、1838年4月30日—パリ、1920年5月5日)

1855年10月にジャック・オッフエンバック（1819—1880）と出会い、彼女はオッフエンバックの良き助言者となった。オルタンス・シュネーデルは、『ヴァイオリン弾きと眠れる森の美女の息子』によってパリでデビューし、『番犬』、『頭のいかれたジャン』、『魔法のランタン』に続きざまに出演した。まったく個性的な声と嘲笑的な調子を付与されていた彼女は、ヴォードヴィルや軽演劇など即興的作物の作者(400本以上の作品)で、舞台上に「滝」をつくったランベール・ティブストのお陰で評判を勝ち得た。彼の舞台は俳優たちに即興で演じる楽しさを残すものであった。歌のなかで俗語をつかい、滑稽な言動のパロディーを得意としたオルタンス・シュネーデルは、その風刺と大胆さで次第に多くの聴衆を獲得していった。1863年から、彼女はオッフエンバックの音楽になる、メイラックとアレヴィ作の多くのオペレッタに出演した。『ブラジル人』は以後1870年にいたる長く実り多い二人の協力関係を確固としたものにし、その後は『美しきエレヌ』(ヴァリエテ座で1864年12月17日に上演)、『青髯』、『ゲロルスタイン大公夫人』(1867年4月17日に上演され喝采を浴びた)、『ラ・ペリショル』(1878年)、そしてゲエテ座でのヴィクトリアン・サルドゥーの『ニンジン王』(1872年)などの成功で栄光を勝ちえた。

メリー・ローランが端役を演じたのはこの最後の作品で、そこから二人の女性〔オルタンスとメリー〕は、この時期に知り合ったと推測することができる。ただこの時期、個性の強い二人の女性が親しくしていたかどうかは分からない。むしろ彼女たちの交遊は、メリー・ローランがエヴァンス博士に囲われて、役者という職業にきっぱりと背を向けたときからと考えられる。舞台上のマドンナであるとともに、社交界のマドンナでもあった二人はお互いを、偉大で力を持ち、恋愛の上でも数々の征服をなしとげた存在（「王子たちの通い道」という称号が似合う）と認めたのである。オルタンス・シュネーデルは1880年代

からは、メリー・ローランの家を足繁く訪れ、しばしばピアノの前に座ってメリーが歌う歌の伴奏をした。

S. H.

フィリップ・オーギュスト・ヴィリエ・ド・リラダン (サン・ブリユ、1838年—パリ、1889年)

フランスのもっとも古い家の一つの出であるヴィリエ・ド・リラダンは、全生涯を貧乏のうちに過ごした。高踏派の作家たちからは絶賛されたが、大衆的成功や好評は得られなかった。彼の名声の基は、1883年に発表された『残酷物語』のようは語り物形式によるものである。この作品はマラルメの『叡智』[ママ、ヴェルレーヌの間違いか]やユイスマンスの『さかしま』と並んで、若い象徴派世代に大いに注目された。別の短編集である『トリビュラ・ボノメ』(1887年)では、タイトルとなった人物はヴィリエが憎悪してやまないブルジョア意識を体現している。

彼はマラルメやユイスマンスと親しい関係を結んだが、それは二人がカチュール・マンデスが主筆をつとめた「文芸共和国」に協力して、1876年に出会ったときからである。マラルメは、ヴィリエが雑誌「祖国」の演劇批評欄に職をえられるように努力した。マラルメはメリー・ローランやユイスマンスとともに、彼に終生忠実だった。リラダンがパリの「サンジャン兄弟施療院」で亡くなる時も、彼らは支えとなった。三人はヴィリエの最後の瞬間に、息子を嫡子とするために結婚式をあげさせ、墓をつくるのに経済的援助を惜しまなかった。ヴィリエはメリー・ローランに、『残酷物語』の一冊に献辞をつけて贈っている。

「メリー、あなたのアリエルの眼は
その空のような美しさで、少しばかり、
墓の色をしたこれらの物語を愛でる。
そして、あなたの夕べを
楽しいものにしておくために、わが黒鳥は
鳩に代わって叫び声をあげる。」

M. L.

ジェイムズ・アボット・マクニール・ホイスラー (ロウエル、マサチューセッツ、1834年—ロンドン、1903年)

画家で版画家。ホイスラーは最初ロシアで科学の教育を受けた。彼の父はアメリカ人の技師で、モスクワとセント＝ペテルスブルクを結ぶ鉄道建設の監督をしていた。画家はエルミタージュ美術館で絵を発見した。彼はロシア皇帝の宮殿での公式用語だったフランス語を習得した。次いで一家はアメリカに戻る前にイギリスに滞在することを選んだ。

1855年、彼はパリで絵を学ぶことを許され、帝国美術学校のデッサン科(今日の装飾美術学校)に登録した。そこで版画家のフェリックス・バックモン、アンリ・ファンタ＝ラトゥールと出会い、彼らと長きにわたる友情を結んだ。さらにエドゥアール・マネとも友だちになった。彼らはみなクールベを賞賛してやまなかった。《ピアノ弾き》が官展で拒否された後(1856年)、ホイスラーはロンドンに住むことにした。彼はロイヤル・アカデミー

の官展で多くの成功を勝ち得た。1861年、パリのバティニョール大通りにアトリエを借り、極東の芸術——日本の浮世絵と中国の陶器——に夢中になった。彼はそれらをよく装飾おモチーフとして利用した。

彼はロンドン、ブリュッセル、パリで定期的に展覧会を開き、印象派の画家たちに強い影響をおよぼした。またさまざまな万国博覧会（ロンドン、パリ、アムステルダム）で成功をおさめた。1887年にはケンブリッジで『テン・オックロック（十時）』と題した講演を行い、そこで自身の芸術観を披露した。マラルメは1888年にこれを翻訳したが、この時から画家と詩人の間に途切れることのない友情が結ばれた。詩人はアントナン・プーレスト、画商のテオドール・デュレ、ギュスターヴ・ジュフロワ、それにロジェ・マルクスの支援をうけて、ホイスラーの《芸術家の母の肖像》をリュクサンブール美術館（現オルセー美術館）に買い上げさせた。彼はまた H・ド・レニエを伴って、バック通りの画家の家をよく訪れた。そして画家をヴァルヴァンの家に迎え、画家はそこで娘のジュヌヴィエーヴの肖像を描いた（1897年）。

マラルメのお陰で知り合ったメリー・ローランと親しくなり、彼女はホイスラーを熱烈に讃美するようになり、さまざまな形で彼を助けた。彼女は彼の作品をエヴァンス博士のために購入し、雑誌「ザ・アメリカン・レジスター」に、彼についての記事が出るように取り計らった。ホイスラーはメリー・ローランの肖像画は描くことはなかったが、この「大きな力をもつ魅力的な夫人」を敬愛していた。

M. L.

年表

1849年4月29日

ナンシー市スタニスラス通り 86 番地の、マリー＝ローズ・ルヴィオ（1809年4月14日—？）の私生児として生まれる。

1864年5月2日

マリー＝ローズ・ルヴィオは、ナンシー市ドミニカン通りの総菜屋、ジャン＝クロード・ローラン（1836年—1891年）と結婚。

1864年8月31日

ジャン＝クロード・ローランの倒産が宣告される。マリー＝ローズは財産分与をえる。

1864年末？

パリに行き、女優マリー・ローラン（1826—1904）が営む芸術孤児院に入る。マリー・ローランは『テレーズ・ラカン』で母親役を演じ、次いで 1887 年から 1888 年にかけて、『パリの胃袋』でメユダン夫人、『ジェルミナル』でマユードの役を演じた。これが、メリー・ローランが 1870 年に舞台へデビューするのに役立ったのは間違いない。

1872年—1873年

メリーは、ヴィクトール・サルドゥー作、オフエンバック音楽の『ニンジンの王様』に端役でデビューする。

このとき彼女は、モスコー通り 29 番地の 2 階に住んでいた。

1874年—1875年

彼女はトーマス・ウィルトバーガー・エヴァンス博士（フィラデルフィア、1823—パリ、1897）と出会う。彼は皇帝一家の外科医・歯科医で、ローマ通り 52 番地に住んでいた。

彼女はナンシー市からエリザ・ソセを呼び寄せ、ソセは彼女のお手伝いとなった。

1876年

エドゥアール・マネとの最初の出会ひ。

1878年

メリー・ローランをモデルにして、マネはパステル画の制作をはじめめる。

1880年

エヴァンス博士がランヌ大通り 9 番地に所有するタリュ荘を、メリー・ローランにあたえる。

1882年

マネにより、《フォリー＝ベルジュールのバー》の後景に、バルコニーに肘をついた姿で描かれる。さらにマネは《秋》を描きはじめめる。

1884年1月

メリー・ローランはマラルメと一緒に国立美術学校でのマネの回顧展を訪れる。

1888年8月15日—25日

マラルメはメリー・ローランとエヴァンス博士の招きでロワヤに滞在する。

1893年4月1日

メリー・ローランは誕生日翌日のこの日から、マラルメの手助けで内装をし直したタリュ荘にいつものように滞在する。

1897年5月15日—18日

メリー・ローランはヴァルヴァンのマラルメの家に滞在する。

1897年11月15日

エヴァンス博士死去

1898年9月9日

ステファヌ・マラルメ死去

1898年11月23日

メリー・ローランは二度目の遺書で、レイナルド・アーンを彼女の受遺者兼遺言執行人とする。

1900年11月26日

メリー・ローランがパリのローマ通り 52 番地で死去。

1902年12月13日

セーヌ県の民事裁判所は、1898年11月23日の遺書以前の条項をすべて無効とする旨を宣告する。

1905年

《秋》がナンシー美術館に入る。

書誌抜粋

- ジャック＝エミール・ブランシュ『絵画について』、パリ、エミール＝ポール兄弟書店、1928年
- クロード・キュエノ「ステファヌ・マラルメの『インドの物語』の源」、*メルキュール・ド・フランス*、1938年11月15日号
- ミシェル・フルラン『オーギュスタ・オルメスあるいは、禁じられた栄光。十九世紀の女性作曲家』、パリ、オトゥルマン出版、「想い出」叢書、2003年
- ロベール・ゴファン『生きていたマラルメ』、パリ、ニゼ書店、1956年
- レイナルド・アーン『覚書（一音楽家の日記）』、パリ、プロン社、1933年
- J・K・ユイスマンス『秘密の手帳』、「文芸フィガロ」1964年7月2日から8日にかけて再掲
- ステファヌ・マラルメ『メリー・ローランへの手紙』、ベルトラン・マルシャル編、パリ、ガリマール書店、1996年
- ステファヌ・マラルメ『書簡集』、アンリ・モンドールとジャン＝ピエール・リシャール編（第一巻）、アンリ・モンドールとロイド・ジェイムズ・オースチン編（第二巻～第十一巻）、パリ、ガリマール書店、1959年—1985年
- アンリ・モンドール『マラルメの生涯』全二巻、パリ、NRF、ガリマール書店、1941年
- アンリ・モンドール『より親密なマラルメ』、パリ、ガリマール書店、1944年
- ソフィー・モヌレ「印象主義とその時代」、『挿入入り国際辞典』、パリ、ドノエル社、1979年
- ロベール・ド・モンテスキュー『フランドルの二幅対』、『フランスの三幅対』、パリ、サンソ社、1921年
- ロベール・ド・モンテスキュー『消された足跡』第二巻、エミール・ポール、1923年
- ジョージ・ムーア『ある若い英国人の告白』、パリ、ストック社、1825年
- ジョイ・ニュートン「ゾラと星の中の跳躍」、コレット・ベッカー論叢『小説における現実の再現』所収。パリ、オゼア出版、159—171頁
- アントナン・プルースト『エドゥアール・マネ、回想』、リー・ルヌアール、H・ローランズ、1913年
- ジョゼット・ラウール＝デュヴァル「メリー・ローラン」、雑誌「眼」七七号、一九六一年、三三頁—三八頁、八〇頁—八二頁
- アンリ・ド・レニエ『名残の炎』、パリ、メルキュール・ド・フランス社、1921年
- アンドレ・ロドカナッチ「ステファヌ・マラルメとメリー・ローラン」、*愛書家会報*、1979年、489—507頁
- ドゥニールとダニエル・ウィルデンスタイン『エドゥアール・マネ。カタログ・レゾネ』（I 油彩、II パステル画、デッサン）、ローザンヌとパリ、1975年
- ジェラルド・シュールとピエール・カバンヌ『絵画の小作家たち、明日の価値』、パリ、素人出版、1985年

展覧会のカタログ

- 『ジャック＝エミール・ブランシュ、画家（一八六一年—一九四二年）』、ルーアン、美術館、1997年10月15日—1998年2月15日。ブレスシア、マルティネンゴ宮殿、1998年3月—6月、パリ、RMN〔国立美術館連合〕、1997年

『アンリ・ジェルヴェックス、一八五二年—一九二九年』、ボルドー、美術画廊、1992年5月11日—8月30日。パリ、ミュゼ・カルナヴァレ、1993年2月1日—5月2日。ニース市美術館、1993年5月27日—8月29日。パリ、パリ美術館、1992年

『マラルメ、一八四二年—一八九八年、書くことの宿命』、イヴ・ペイレ監修の展覧会用カタログ、オルセー美術館、1998年9月29日—1999年1月3日、パリ、ガリマール書店、RMN、1998年

『マネ、一八三二年—一八八三年』、パル、グラン・パレ、1983年4月22日—8月1日。ニューヨーク、メトロポリタン美術館、1983年9月10日—11月27日、パリ、RMN、1983年

読者はインターネットのサイト、www.petroz.com で、マネとメリー・ローランの関係についてのさまざまな映像と情報と、同時にメリーのものと思われる、これまで公表されていない肖像を見ることができる。

写真の著作権

ディジョン、美術館 / ジルヴァル : 43。ナンシー、美術館 : 表紙、4、45。ニューヨーク、アクアヴァラ・ギャラリー、44。パリ、ジャック・ドゥセ文学文庫 / シュザンヌ・ナジ : 34、35、36、37、38、39、40、41、42、48、50、51、52、53、54。パリ、国立図書館 / 複製サービス : 34、35、40、41、46、54、56、57。RMN [国立美術館連合] / ベルナール P. : 58。RMN / ルワンドウスキー H : 47。RMN / オジェダ R・G・ : 57。RMN / ショルマン : 6。ルーアン、美術館 / トラガン・ディディエとランシアン・カトリーヌ : 55、56。

ゾラの『ナナ』、それにマルセル・プルーストの『失われた時を求めて』のオデット・スワン創造の源となった女性、アンヌ＝ローズ・シュザンヌ・ルヴィオ、通称メリー・ローラン(1849－1900)は、数奇な運命をたどった。バリエテ座やシャトレ劇場で端役をつとめ、アメリカ人の金持の愛人エヴァンス博士に囲われ、マネやマラルメの作品に靈感をあたえた。メリーは1870年から1900年にかけて、そのバラ色の肌と優雅さで、パリ社交界の中心を闊歩した。彼女のサロンはさまざまな思想の交換の場であり、そこを訪れた人びとの創作に強い影響をおよぼした。サロンに迎えられたのは、画家(マネ、ブランシュ、ジェルヴェクス・・・)、詩人や作家(マラルメ、コペ、ユイスマンス、プルースト、そしてゾラ)、彫刻家、歌手、音楽家(オルタンス・シュネデル、あるいは彼女の遺言執行人となるレオナルド・アーン)など、アントナン・プルーストのような芸術の世界での重要人物たちであった。

彼女は寛容さを発揮して、生まれ故郷であるナンシー市に、マネによる彼女自身の肖像画《秋》を寄贈した。そしてこれは地方の美術館が収蔵するこの画家の最初の絵となったのである。